

聖徒の道

9
1994



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1994年9月号



表紙——1994年6月5日、ハワード・W・ハンター大管長は教会の第14代大管長として聖任され任命された。十二使徒定員会でハンター長老とともに働いたジェームズ・E・ファウスト長老が、奉仕と信仰に満ちた予言者の生涯を紹介している。(本誌「ハワード・W・ハンター大管長 空を飛ぶ鷲のように」p.2 参照) 写真撮影/メレット。

裏表紙——『黄金の選択の糸』『聖徒の道』1990年1月号, p.18。

こどものページ表紙——写真/デニス・カービー

一般

ハワード・W・ハンター大管長 空を飛ぶ鷲のように 十二使徒定員会会員ジェームズ・E・ファウスト	2
主の羊の群れに戻る ビセンテ・ムーニョス・ウヨア	22
心にできた鉄の壁 アースラ・フィッシャー	24
み手に守られ テオドルス・G・パールマン	30
敵兵の日記 スチーブン・G・ピッダルフ	32
私の先祖を見つけました ヤラ・カッサブ・デロローソ	44
うってつけの教師 ウェンディー・エバンス・ユードイー	46

青少年

吟味して得た証 ウィリアム・G・ダイヤー	20
質疑応答 たった一度だけ、たばこやお酒を試すのはいけませんか	26
ティカルにおける神殿と証 マービン・K・ガードナー	34
心の錨 M・ラッセル・バラード	40

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ 聖典から学ぶ——生涯続ける研究	25

こども

おいで、ラマ! バーナ・ターピン・ボースキー作	2
小さなお友だちへ——デニス・B・ノイエンシュバンダー長老	6
分かち合いの時間——わたしはあなたをゆるします ジュディ・エドワーズ	8
歌 いましめをまもるひとを バーバラ・A・マッコノキー	10
神聖な場所 ジェーン・マクブライド・チョート作	12
エズラ・タフト・ベンソン ケリー・リックス・アダムズ	14
おもちゃばこ——しんでんへの道 コーリス・クレイトン	16

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ハワード・W・ハンター、ゴードン・B・ヒンクレ、トーマス・S・モンソン
 十二使徒定員会：ボイド・K・バック、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド
 編集長：レックス・D・ピネガー、ジョー・J・クリステンセン

顧問：ウィリアム・R・ブラッドフォード、スペンサー・J・コンディ、ジョン・H・グローバーク

教科課程管理部責任者

実務部長：ロナルド・L・ナイトン
 企画・編集ディレクター：プライアン・K・ケリー
 グラフィックディレクター：アラン・R・ロイボーク
 機関誌グラフィックディレクター：M・M・カワサキ

国際機関誌

編集主幹：マービン・K・ガードナー
 編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン
 編集副主幹：デビッド・ミツチェル
 編集補佐/こどものページ：ディエーン・

ウォーカー
 工程管理：メアリーアン・マーティンデル
 アートディレクター：スコット・バン・カンペン
 デザイナー：シェリー・クック
 制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

予約販売スタッフ
 購読管理ディレクター：B・レックス・ハリス
 配送部長：クリス・クリステンセン
 マーケティング部長：ジョイス・ハンセン、ケント・H・ソレンセン

聖徒の道 1994年9月号第38巻第9号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30
 電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 リック/クロスロード
 定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
 半年予約1,100円(送料共)
 普通号150円、大会号350円

Copyright © 1994 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1992年10月 翻訳承認—1992年10月 原題—International Magazines September 1994. Japanese. 94989 300
 ●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙(お申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。
 ●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seto No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seto No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

船上の友

私は貨物船の機関士として働いており、かなり長期間にわたって、フィリピンにいる家族や地元のワード部を離れなければなりません。船に乗っていると、世のさまざまな誘惑に遭ったり、試しを受けたりします。しかし、イエス・キリストの福音に対する自分の証^{あかし}がそれらの誘惑に対する盾となっていることに感謝しています。

信仰深く愛に満ちた妻とふたりの子供たちに感謝しています。彼らは定期的に「タンプリ」(フィリピンの英語版)を私あてに送ってくれます。その中の数々の記事や大会報告の説教は、どれも私の福音の知識を増し、より堅固な信仰を築くのに役立っています。船に乗ってどこへ行こうとも、この機関誌は私と教会をつなぎ止めてくれます。

フィリピン、ラスピナスステーク部
 マンティンルーバ第2ワード部
 レヒノ・ペナランダ

証を強める

「デア・シュテルン」(ドイツ語版「星」の意)のすばらしい記事を、いつも感動しながら読んでいます。とりわけ大管長会からのメッセージは、私の証を強めてくれます。また世界じゅうの末日聖徒が記す体験談は、しばしば私の心を捕らえ、苦しい時に做らすべき指針を与えてくれます。

これからも欠かさずこの機関誌を読んでいくつもりです。

ドイツ、ミュンヘンステーク部
 カウフボイレンワード部
 フォルカー・ゲブハート

隔から隔まで

1992年の4月、私は家族の中で初めてバプテスマを受け、教会の会員になりました。ひとりで子供を育てている私の改宗に対し、否定的な目で見る人々もいます。それに対処していくのは必ずしも容易なことではありません。

しかし、バプテスマを受けたのは何物にも勝る経験であり、教会に入ると決めたことを後悔してはいません。4歳の娘が証をはぐくめるよう心がけていますが、それは私にとってすばらしい機会です。

「リユース・オーベル・ノルゲ」(ノルウェー語版「ノルウェーの光」の意)は私の霊的な支えとなっています。いつも隔から隔まで読んでいます。娘は「こどものページ」が大変気に入っています。ふたりに郵便受けをのぞくたびに、自分のための「こどものページ」が届いていないか尋ねるほどです。

今では教会員となった母と妹とともにこの機関誌の記事について話し合ったりもします。教会員ではない友達にも紹介していますが、皆、喜んで読んでくれます。ほかに、いろんな人が読めるように、病院の診療室やフェリーボートの客室など、できるだけ多くの場所にこの機関誌を置かせてもらっています。

ノルウェー、スタバンガー地方部
 ベルゲン第1支部

エルドリッド・ヘレン・アントネッセン

ひとときわ大切な目的

これまでさまざまな書物、雑誌、新聞を読んできましたが、「リアホナ」(スペイン語版)ほど平安と喜びをもたらしてくれる読み物はほかにありませんでした。

さまざまな記事に記された教会員の犠牲を知るにつれ、思うことがあります。それは、地理的な隔りがあるにもかかわらず、私たちはひとときわ大切な目的によってひとつに結ばれているということです。つまり、この栄えあるみ業にあつても働き、福音を分かち合いたいと、教会員全員が熱烈に感じているのです。

ドミニカ共和国、サントドミンゴ・インディペンデンシアステーク部
 ピアンティニ支部
 フワン・エレディア

ハワード・W・ハンター大管長

空を飛ぶ鷺のように

ハワード・W・ハンターは、15歳の時アイダホ州で2番目にイーグル章を受章したスカウトとなった。(下) それ以来、イエス・キリストの特別な証し人としてより優れた奉仕と信仰の人生を歩んでいった。



ハンター大管長は、これまで私たちが知っている人の中で、最も愛情にあふれたキリストのような方のひとりです。彼の靈性の高さは計り知れないほど高いものです。長年主の特別な証し人として主イエス・キリストの導きの下で仕えてきたハンター大管長の靈性は、驚くべき方法で高められてきました。それは彼の全身にみなぎる力の源となっています。彼は神聖な事柄を静かに、また謙遜に受け止め、そうした事柄を慎重に語ります。また、すばらしい心の平安と落ち着き、そして、神の子供たちの中で際立って気高い心の持ち主です。彼がたびたび経験してきた大きな苦難は、この時代、この日、地上にあって神の清い器となり予言者となるための「精錬の火」だったのです。

十二使徒定員会会員
ジェームズ・E・ファウスト

末 日聖徒イエス・キリスト教会の第14代大管長となったハワード・ウィリアム・ハンター長老は、最初の記者会見で次のように述べました。

「私は長い間涙を流し、このたび就くことになった高く神聖な召しにふさわしい者となれるように、熱心に天父に祈り求めました。

この数時間、そしてこの数日間、私に最大の力を与えてくれたのは、これが神のみ業であって人の業ではなく、イエス・キリストがこの教会の権威を持った生ける頭であり、主がみ言葉と行ないをもって導いてくださっているという、変わらぬ証です。私はみずから捧げ、力の限りを尽くし、全身全霊で主に仕えたいと思います。……

世界のあらゆる国々の教会員とあらゆる地域の人々に、私の愛をお伝えします。……私たちが互いにもっと親切にし、もっと礼儀を尽くし、もっと謙遜で、忍耐強く、赦し合えるように祈っています。……

主の官居を、教会員であることの崇高な象徴とし、最も聖なる誓約を交わす至高の場所として確立してください。神殿に参入するふさわしさをすべての教会員が身





ハワードは明るく元気な子供だった。
生後8カ月、1歳、2歳の時。

につけること、それが私の心の奥底からの願いです。神殿が近くにないために、すぐにあるいは頻繁に参入できないとしても、すべての成人会員が有効な神殿推薦状の発行を受けるふさわしさを身につけられるように、また推薦状を所持できるように願っています。」¹

この後、ふたりの副管長が短いあいさつの言葉を述べました。第一副管長のゴードン・B・ヒンクレー長老はこのように述べました。「ハンター大管長、ありがとうございます。この教会では、どのような責任を受けて働くのも名誉あることですが、過去33年間にわたって親しい交際を続けてきたハンター大管長とともに働くことは、特に大きな名誉と特権です。ハンター長老はきわめて有能な方であり、親切で、品位があり、主のみ業に完全に献身していらっしゃいます。全世界にこのみ業を推し進めるうえでなすべきことはたくさんあります。敬愛するこの指導者と一緒に働くに当たり、最善を尽くしたいと思っています。」

第二副管長のトーマス・S・モンソン長老は、こう語りました。「ハンター大管長、私はあなたの第二副管長として、大管長会で一緒に奉仕させていただく機会を楽しみにしております。私が十二使徒になって以来、私たちは30年以上、ともに働いてきました。私は

あなたがきわめて有能な方であり、深い憐れみの心を持った方であることを、すべての人に知ってほしいと思っています。あなたは飢えた人々、家を失った人々を心にかける指導者です。そして、主と同じ精神をもって、いつも人々を主の方向へ押し上げようとする高い願いを持っていらっしゃいます。あなたが人々を教え導くときに、神の祝福がありますように。」

この魅力的で、超人的で、特別な才能の持ち主であるハンター大管長を描写しようとするのは、翼を広げて空を飛ぶ鷲の軌跡²をとらえようとするようなものですが、これから、彼が約86年間の人生で翼を広げてきた足跡をたどってみたいと思います。

22歳の若者のころ、ハワードは祝福師の祝福を受けました。祝福文には、彼を「主が前世で知っておいでになったこと」、彼は「天の軍勢の中で強い指導者として働き」、「主の選民に関する〔主の〕目的を成就するために地上で重要な仕事をなすよう」聖任されたことが述べられていました。また、彼の忠実さに基づいて「神からの英知」を受け、「いと高き神の祭司であるとともに、この世における技能を身につけ、この世の知恵を教える教師」となると約束されました。さらに、みずからの才能を用いて教会で奉仕し、教会のさまざまな評議会の一員となり、英知と

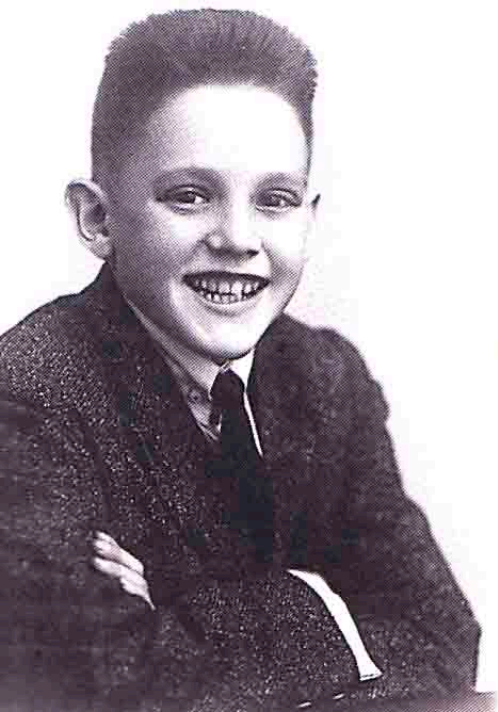
正しい判断力の持ち主として知られると述べられていました。³ハワード・ハンター長老の祝福文は、主が予言者エレミヤに述べた次の言葉を思い起こさせます。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした。」⁴

ハワード・W・ハンター大管長の先祖は、スコットランド、スカンジナビア、そしてアメリカ合衆国出身の忠実な人々です。彼の曾祖父、ジョン・ハンターはスコットランドのペイズリーに住み、布や織物を製造していました。アメリカ合衆国に移住した後、ソルトレークシティ⁵に来て、運送業を始めました。

彼の曾祖母、ナンシー・ハッチは、かつて日記にこう記しています。「モルモン⁶の説教者〔ジョセフ・スミス〕の所へ行き、欺かれないようによく注意して話を聞いた。話のテーマはキリストの再臨⁷についてだった。ジョセフ・スミスが真実を語っていること、彼は真実の予言者であり、偉大な業を行なうために神から召され、聖任された人であるという証を、私は得た。なぜなら、イエス・キリストとその使徒たちが教えたように真実を教えたからだ。そして、私はバプテスマを施してくれるよう申し出た。」⁵



ハワードはアイダホ州ボイシで、仲良しの妹、ドロシー（上）と一緒に成長した。兄は（下——12歳ごろ）平和を作り出す人だったとドロシーは語っている。

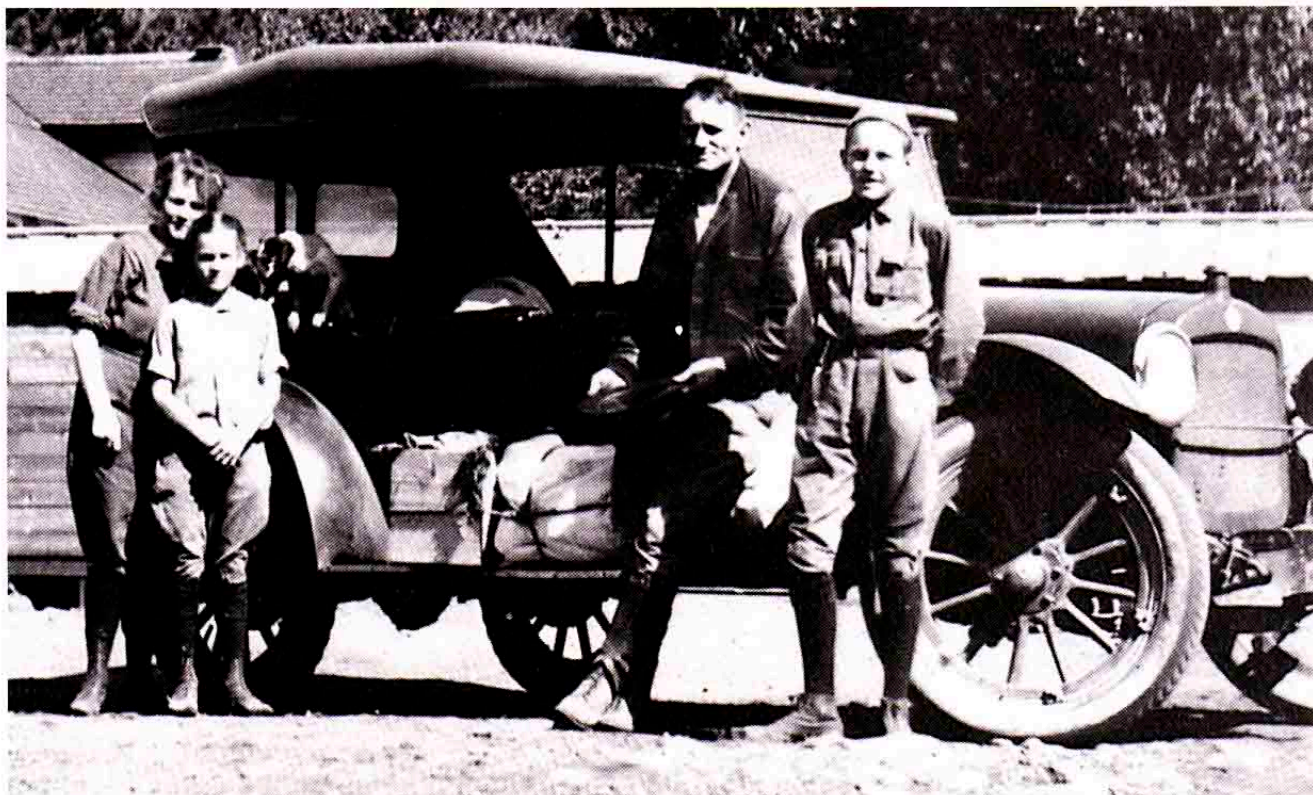


1904年、後にハンター大管長の母親となるネリー・マリー・ラスマッセンは、ユタ州マウントプレザントの家からアイダホ州ボイシにいるおばを訪ねました。そこに滞在中、彼女はジョン・ウィリアム・ハンターと出会いました。

ふたりはそれから2年間交際しましたが、当時、ジョンは教会員ではありませんでした。ネリーは、教会員以外の人と結婚したくないと思い、マウントプレザントへ戻りました。けれども、ジョンの気持ちは変わらず、ふたりは1906年12月3日に結婚しました。ふたりはボイシへ移り、シャーマン通りに小さな家を借りました。1907年11月14日にハワード・ウィリアム・ハンターが誕生し、2年後に妹のドロシーが生まれました。

妹のドロシー・ハンター・ラスマッセンは最近亡くなりましたが、子供のころ兄とともに過ごした時の、心温まる出来事を次のように述懐しています。

「ハワードはいつもよいことを行ない、よい子になりたいと思っていました。私をよく面倒見てくれるとてもよい兄でした。両親に対しても思いやりがありました。また、動物が好きで、捨てられた動物をよく家に連れて来ました。」家のそばには灌漑用水路があり、ある日、近所の教会員ではない少年たちが数人で、子猫をその水路に落として遊んでいました。子猫がはい上がってくると、また落とすのです。彼らはこの遊びを飽きるまで何度も続けていました。「ハワードが通りかかり、〔子猫〕を拾い上げました。死にかけて横たわっているのを、家へ連れて帰りました。母はもう死んでいるのではないかと思いましたが、ハワードとふたりで毛布にくるみ、温かいオープンなそばに置き、看病しました。」子猫は息を吹き返し、何年も飼われることになりました。ドロシーはこのように述べています。「兄はとても親切でした。それに、私は兄が間違ったことをするのを、



これまで一度も見たことがありません。』⁶

ドロシーは、兄が年輩者に対してとても礼儀正しく、彼らの必要を思いやっていたのを思い出して、このように述べています。「子供のころ、牛を飼っている人の所へふたりでよく牛乳を買いに行ったものです。毎晩、牛乳を買いに行くのはかなり大変な仕事でした。約3.5リットル入ったキャンパス地の袋に牛乳を入れて運びました。近所にご主人に先立たれた婦人がいて、私たちはいつも牛乳を少し届けました。』⁷

ドロシーとハワードは仲の良いきょうだい兄妹でした。ドロシーはこのように書いています。「私たちふたりはいつも一緒でした。ハワードはどんなときもとてもやさしく、最高の兄でした。私たちはボイシ川の近くに住んでいて、牧草地を横切ったり、鉄条網をくぐったりしなければならないことがありました。ある日私がとても憤慨していたので、

母が『どうしたの』と、聞きました。

私はこう答えました。『ハワードが私よりもベアトリスのために長い間、鉄条網を支えてあげたのよ。』⁸

ハワードは絶えず何かに取り組み、働いていました。新聞売りをはじめ、いろいろなことをしました。賞品として木琴を手に入れたこともあります。私たちの家には細長い居間があり、一方の壁にはハワードが持っている楽器が全部立てかけてありました。兄は優れた音感の持ち主でした。また、朝、学校へ行く前に美術学校で働き、絵の額縁の作り方を学びました。』⁹もうひとつ、少年時代によくやっていたことは、捨ててある壊れた目覚まし時計を拾って来ては、分解して修理し、油を差して、動くようにすることです。それを売っては小さなお遣いを稼いでいました。

ハワードがした仕事のひとつに、レモンをより分ける仕事がありました。緑色のレモンと黄色のレモンを分ける

1919年、ジョン・ハンター、ネリー・ハンター夫妻。ふたりの子供、ハワードとドロシーを連れて新しい車（上）で旅行した時のもの。1927年にハワードは、自分のオーケストラを導いて、東洋までさらに長い旅をした。（下）





1928年、ハワードは教会のダンスパーティーでクララ（クレア）・メイ・ジェフスと出会った。ふたりは1931年6月10日にソルトレーク神殿で結婚した。

仕事です。これは、ハワードに適性がない数少ない仕事のひとつでした。色盲のため、色を見分けることができなかったのです。おもしろいことに、後に彼はバナナについてはどうにか見分けられるようになりました。

ふたりは仲良しでしたが、ハワードと妹のドロシーとは性格が少し異なっていました。ドロシーは自分自身のことを、気むずかしいときがあり、たまにいざごを起すこともあると認めていましたが、ハワードはいつもやさしく、上品で、平和を作り出す人だったと断言しています。彼の礼儀作法は少年の時できえ、大変すばらしく、婦人たちは「うちの息子もあんなだったらいいのに」とよく言ったものでした。

高校時代、ハワードの音楽への関心は一層強まり、特にコンテストでマリリンバを賞品にもらってからは、ますます強くなりました。15歳の時、ハンターズ・クルーネイダーズという名前の自分自身のオーケストラを編成し、ボイシのほとんどの高校のダンスパーティーで演奏しました。高校を卒業すると、彼とそのオーケストラは1927年に東洋に向かう巡航船で演奏しました。彼の父はこのころパプテスマを受けま

した。

船上でオーケストラ演奏をしていくらかお金を稼ぐと、ハワードはフォード車を購入しました。それはきれいでも新しくもなく、買った翌日にはもう故障してしまいました。しかし、優れた修理工であったハワードは、2日かけて修理しました。それ以来、彼は「よろず修繕屋」で通っています。1980年代に入り70代半ばになった時、彼は骨董品の域に達するような大きな白い車を運転していました。部品が摩耗していましたが、代替品を見つけられません。彼はその車に愛着を抱いていたので、家にある道具を利用し、自分で部品を作っていました。

1927年にアジアから戻って間もなく、ハワードは南カリフォルニアに住んでいた友人のネッド・レディングに会いに行きました。真剣に考えた後、そこにとどまり、仕事を探そうと決心しま

した。1928年にイタリア銀行で職を見つけ（後にアメリカ銀行に移った）、大学の単位を修得するために夜間の講座に登録しました。この友人のネッド・レディングが、1928年6月8日にウィルシャーワード部で行なわれた若人を対象としたダンスパーティーで、女性の友人をハワードに紹介しました。彼女の名前はクララ（クレア）・メイ・ジェフスといいました。一目ぼれをしてしまったハワードは、クレアに言いました。「どうして今までぼくとつきあってくれなかったの。」彼女は言いました。「誘ってくれなかったからよ。」間もなくふたりはデートを始め、1931年の初めに婚約し、その年の6月10日に結婚しました。

婚約後、ハワードは音楽を職業とすることをあきらめ、結婚生活と家族のために新しい目標を設定することにしました。それ以来、家族の集まりの時



大恐慌のある年の夏、ハワードとクレアはキャンプ生活をし(左)、ハワードは道路の橋の塗装をした。いろいろな職業を経た後、ハワードは法人の顧問弁護士になり、多くの会社の理事になった。彼がいちばん愛したのは常に家族、すなわちクレアとふたりの息子ジョンとリチャードだった。ハンター大管長には現在18人の孫がいる。若いころから音楽を愛し、友人や家族のためにしばしば楽器を弾いてきた。(下)

にだけ楽器を弾くようになりました。

結婚してからの数年間は、1930年代の不況が悪化しました。お金を稼ぐために石けんの訪問販売をしたり、測量技師として働いたり、塗装業を営むクレアの父親を手伝って橋にペンキを塗ったりしました。1934年3月20日にハワード・ウィリアム・ハンターJr.が誕生し、ハワードとクレアは親となりました。ところがその年の夏、悲劇が起こりました。幼い息子ハワードは、腸に潰瘍ができて手術を受けましたが、助からず息を引き取ったのです。

同じ年の1934年、ハワードはロサンゼルス郡洪水防止地区で、弁護士が裁判のために調査したり資料を整えたりするのを補佐する仕事を見つけました。この仕事のおかげで安定した収入が得られるようになったので、大学に戻り、それまでの経験を生かして、法律の学位を取るために勉強しようと決心しました。それから数年間、昼間働きながら、夜は、最上限の単位数を履修するために、びっしりと授業を取りました。そして、1939年6月に優秀な成績で卒業後、司法試験に合格し、任命を受けて、1940年1月にカリフォルニア州で法律家として開業する許可を得ました。それから後はずっと経済的に安定した

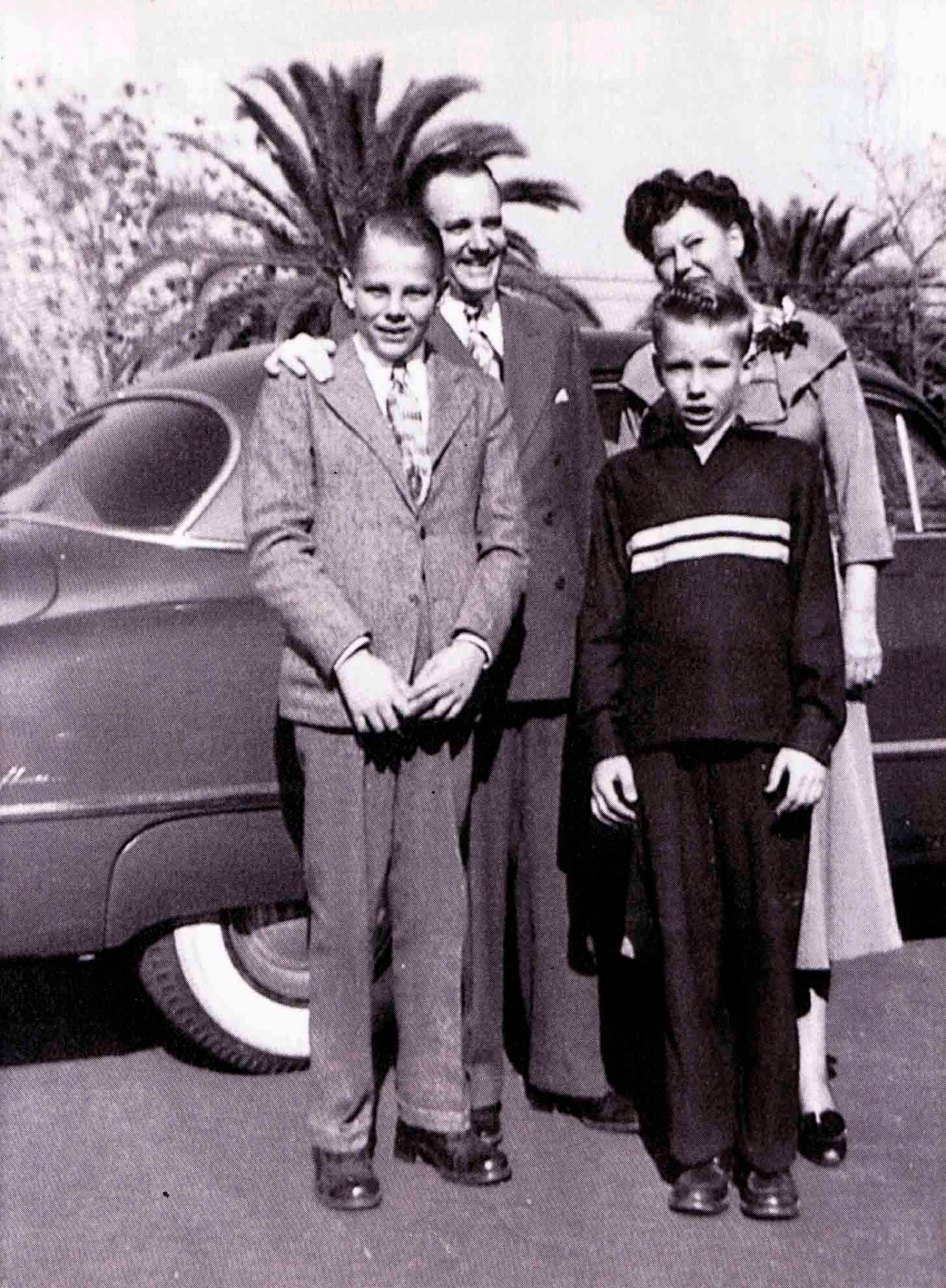
生活をすることができました。それは、主が祝福してくださるあらゆるものに対して、彼が常に賢い管理人だったからです。いつも質素でありながら、出会うすべての人に対して、惜しみなく自分の時間と才能を捧げました。

彼の祝福文に書かれている「重要な仕事」は、個人で法律事務所を開いてから間もなく、1940年9月に始まりしました。パサディナステーク部のエルセレノワード部の監督に召されたのです。

1946年11月までその召しを果たしました。ふたりの息子、ジョンとリチャードが生まれて家族が増えると、広い家が必要となり、ハンター家は1948年にカリフォルニア州アーケーディアへ引っ越しました。

1950年の2月、スチーブン・L・リチャーズ長老とハロルド・B・リー長老は、パサディナステーク部を分割する割り当てを受け、ハワード・W・ハンター兄弟をパサディナステーク部のステーク部長に召しました。彼は何のためらいもなく、この召しを受け入れました。青年の時から細かく日記をつけていたハワードは、この時の気持ちを次のように記しています。「妻の内助の功ゆえに私たちが選ばれるのだという幹部の言葉をよく理解することがで







ハンター大管長は、監督、大祭司グループリーダー、ステーキ部高等評議員、ステーキ部長として教会で長年にわたり、また広範囲に奉仕した。南カリフォルニアの福祉地区の責任者や、ロサンゼルス神殿委員会委員長も務めた。1959年10月10日に使徒に召された。(右は1960年代の中期から後期にかけて構成された十二使徒定員会)幹部として、ハンター長老は、ハワイのポリネシア文化センター所長、ユタ州系図協会会長、教会歴史家(左)など多くの責任を果たした。また、幹部としての責任を通して世界各地を訪問した。1968年、トンガの国王タウファハウ・チュボウ4世に拝謁するハンター長老。(下)



きた。クレアは……常に私のそばにいて、私を支持し、理解してくれた。ロースクールにいた時も、監督をした時も、どんな職に就いていた時も。」¹⁰

ステーキ部長としての務めを果たしていた時、福祉プロジェクトとして使用するために503エーカー(約61万6,830坪)におよぶ牧場の購入に携わりました。また、パサディナステーキ部で高校生を対象とした早朝セミナーのプログラムを実施することを検討しました。これは教会の早朝セミナープログラムの先駆けであり、このプログラムは今でもカリフォルニアで行なわれています。

ハワードは、教会の召しと市民としての奉仕、弁護士としての仕事を両立させるだけでなく、卓越した業績を残していきました。ハワードの注意深い思慮に満ちた問題への取り組み方は、ある訴訟事件によく現われています。隣接する牧場で散布した農薬が漂ってきたため、トマトの収穫に害が及び、その補償を求めた原告側をハワードは弁護しました。法廷での彼のみごとな冒頭陳述と、2日目の法廷弁論の後、12人の被告側弁護団は現実的な解決策を提示し、彼の依頼人はそれを受け入れました。彼の正確な思考と論理能力

は、生来の正義感と相まって、彼を力強い代弁者へと大成させたのです。

ステーキ部長として働いていた時、ハワードはアリゾナ神殿への特別訪問のために集まったパサディナステーキ部の聖徒たちに話をしました。それはちょうど46歳の誕生日で、彼は日記にこのように書いています。「私が集会で話をしていると、父と母が白い服を着て礼拝堂に入って来た。父が神殿の祝福を受ける準備ができていたとは考えてもみなかった。しかし、母は長い間それを熱心に願ってきたのだ。私は感激して胸がいっぱいになり、話を続けることができなかった。……それは生涯忘れることのできない誕生日だった。なぜなら、両親がエンゲウメントを受け、私はふたりの結び固めの儀式の証人となる特権にあずかり、さらにその後で両親に結び固められたのだから。」¹¹

1959年10月9日、ハワード・W・ハンターの人生に大きな変化が起こりました。彼は妻のクレアとともに、10月の総大会に出席するため、ソルトレークシティに向かいました。そこでハワードは、デビッド・O・マッケイ大管長が自分に会いたがっているというメモを受け取りました。マッケイ大管

長は彼にこう言いました。「明日、あなたは十二使徒評議員会会員として支持を受けます。」¹²

彼の名前が総大会で提議され、支持された後、ハワード長老はクラーク副管長から十二使徒とともに前の席に着くように招かれました。この時のことを思い起こしてこう語っています。「壇上への階段を一步上るごとに胸の鼓動は激しさを増しました。ヒュー・B・ブラウン長老が私のために席を詰めて場所を空けてくださいました。こうして定員会の12番目の会員として席に着いたのです。皆の目が一斉に私の方に注がれているのを感じ、まるで世界全体の重みが私の肩に覆いかぶさってきたかのように感じられました。大会が進むにつれ、自分のような者がほんとうにこのような場所に座っていてよいものだろうかといぶかしく思うと同時に、なんとも言えない決まり悪さを感じました。」¹³

もちろん、この召しは大きな驚きであり、ハンター長老とクレア夫人の人生を大きく変えました。25年間生活したロサンゼルスを後にし、カリフォルニアの仕事仲間や教会員、親しい友人

たちとも別れなければならないのです。しかし、決断すること自体はやさしいことでした。なぜなら、ハンター長老はこのはるか以前に、個人的、職業的、霊的な決断の基盤となる価値の優先順位を定めていたからです。彼の優先順位のリストの第一位は、神への奉仕でした。

使徒として奉仕した年月は感動的で啓発されるものでした。有益な奉仕をする能力と資格は法律の勉強と弁護士としての経験のおかげだと、彼は語っています。大会説教をはじめ彼の話には、弁護士として身につけた三段論法がたびたび用いられています。その論理の結論には、必ず重要な福音の原則が含まれています。

人一倍謙虚なハンター大管長は、注目されることを決して好みません。「〔彼は〕気取らず控えめで、ほかの人の喜ばせることを常に念頭に置く人です。特別扱われるよりは、グループの一員として見られる方を好むのです。……

仕事仲間の間では、ハワード・ハンターは信頼できる判断力と物静かな知恵の持ち主であると評価されています。

彼はめったに自分自身のことや自分の業績を語ったり、自分の気持ちを伝えたりしません。彼の関心が、ほかの人の業績や感情、満足の方に向けられているからです。……

十二使徒や十二使徒とともに働く人々は、ハンター長老が意見を述べたり、結論や解決策を提示したりする前に物事を慎重に吟味することを知っています。これは、明らかに弁護士として訓練された結果です。彼はほかの人が意見や気持ちを述べるのをじっくり聞き、もし全員が一致できなかつたり、グループのだれかがまだ何か不満を持っていたりすると、票決を強行するよりはむしろ結論を出すのを保留にする方を選ぶのです。¹⁴

彼の同僚であるニール・A・マックスウェル長老は、彼のことをこのように述べています。「ハワード・W・ハンター大管長は柔和な人です。彼は若い時に、ほかの人が仕事を失うことになるからという理由で、自分の求めていた仕事を辞退したことがありました。ふたりでエジプトを訪問する割り当てを受け、くたくたに疲れ、ほこりまみれになって1日をともに過ごしたこと



新大陸考古学財団諮問委員会委員長として、ハンター長老は、チチェン・イツァ（左）をはじめとする、グアテマラとメキシコの遺跡を訪れた。ハンター長老は後にプリガム・ヤング大学のエルサレムセンターの建設を監督した。1983年にマーク・E・ピーターセン長老と一緒に敷地を査察。（右上）、1989年エルサレムセンター献堂を前にして、エルサレム市長ティディ・コレック氏の到着を待つハンター会長。（右）



がありました。私が翌朝目覚めると、この謙遜な方は気づかれぬように黙々と私の靴を磨いていました。このように日々の何げない事柄の中に柔和さは表われるのです。」¹⁵

十二使徒定員会会員としての務めの中には、教会本部での委員会の責任や世界じゅうのステーク部や伝道部を訪問する責任がありました。しかし、新大陸考古学財団の会長に任命された時、彼の前にまったく新しい世界が開かれました。この本格的な調査組織はブリガム・ヤング大学に本拠を置き、メキシコ南部や中央アメリカ北部の考古学研究に携わるもので、リーハイの子孫に関連のある遺跡を探求することを目的として設立されていました。これら

の遺跡のいくつかはかなり原始的なもので、彼はこの責任を受けて、文字どおりジャングルの中へ入って行きました。ハンター長老はゆで卵とバナナを食べながら、そのような状況の中で生き延びることを学んだのです。

ハンター長老は聖地に対していつも特別な愛を抱いてきました。大管長会はハンター長老に、イスラエルのふたつの特別事業を推し進める割り当てを与えました。ひとつは、リグランド・リチャーズ長老とともに、オルソン・ハイド記念公園を建てるための資金集めで、この公園は1979年に奉獻されました。もうひとつは、10年前から始まっていたブリガム・ヤング大学の海外研修プログラムを実施するための施



ハンター大管長の教会における業績や地位も、彼を苦難や悲しみと無縁にすることはなかった。しかし、クレア夫人の長年の病と1983年に訪れた死、さらに彼自身の大きな健康上の問題は、彼の慈愛と信仰を深めることになった。こうした試練のさなかにあっても、使徒としての務めを全力を尽くして果たし（左）、幹部の支持を受けてきた。長年、十二使徒定員会会員のボイド・K・パッカー長老（右）の隣に座ってきた。1990年4月にソルトレイク神殿で、イニッシ・バーニス・イーガン姉妹（下）と再婚した。



設用地に関する交渉でした。エルサレムの土地は非常に高かったのですが、ようやくえり抜きの土地が見つかって借地契約を交わす時が来ました。土地所有者の代理人は借地料を受け取る際、こう言いました。「これはあなたがたにとっても大金でしょう。」すると、教会の卓越したイスラエル人弁護士、ジョセフ・コーイアはこのように答えました。「ええ、確かに大金です。私の先祖は15代にわたってこのイスラエルに住んでいます。同様にあなたがたにとっても、土地は値段がつけられないほど貴重なはずです。」その特別な敷地に、多くの反対があったにもかかわらず、ブリガム・ヤング大学近東研究エルサレムセンターのすばらしい建物が建設されました。ハンター長老がティ・コレック市長やそのほかの指導者たちと個人的に親しかったために、センターを建てることが可能となったのです。こうしてハンター長老は、1989年5月16日にエルサレムセンターを献堂しました。

1983年、彼の愛する妻、クララ・

ジェフス・ハンター姉妹が亡くなりました。彼女は数年前に重症の脳卒中となり、それ以来すっかり衰弱していました。ハンター長老は彼女の看病に当って、自分自身の健康は二の次にして、何年もの間尊敬と無比の献身をもって愛情に満ちた世話をしました。そのかいあって、衰弱していながらもクレアは彼にだけほほえみ、反応を示しました。思いやりあふれるふたりのやり取りを見るにつけ、胸が引き裂かれるような気持ちになったものです。夫が妻に対して示すそのような献身の模範をこれまで見たことがありませんでした。ふたりの愛は宝石のようにきらめいていました。愛とはまさに奉仕なのです。

その後、ハンター長老はいくつかの大きな健康上の問題を抱えました。歩くことはおろか、立つことさえも困難になった時、総大会で車いすに座って説教をし、会衆を驚かせたことがあります。冒頭のあいさつには、彼のやさしいユーモアが光っていました。「失礼とは思いますが、座ったままで話をさせていただきたいと思います。特に



車いすの上から話したいというわけはありませんが、皆さんがいすに座って楽しく話を聞いておられる様子を見て、私もそれに倣いたいと思います。」¹⁶

1988年4月、歩行器の助けを借りて説教壇に立ち、大会のメッセージを伝えました。しかし、話の半ばで体のバランスを失い、後ろに倒れてしまいました。モンソン副管長とパッカー長老、警備員が素早く彼を起こすと、彼は何事もなかったかのように話を続けました。大会の部会の終わりに、ハンター長老はいつものようにユーモアたっぷりにこう言いました。「お花畑に着地したような感じでした。」

1988年12月には、聖徒たちの信仰と祈りにより、彼は幹部が集会を開く神殿の会議室に歩いて行けるまでになりました。

1990年4月12日の木曜日、神殿で毎週行なわれる会合で、すべての議題について討議された後、十二使徒定員会会長を務めるハンター長老は尋ねました。「議題に出ていないことで、何か話したい方はいますか。」だから返事がなかったのも、彼は言いました。「だれもおっしゃりたいことがないので、少し発表させていただきたいと思います。きょうの午後、私は結

婚します。」皆があ然としていると、彼はこのように説明しました。「相手のイニッシはカリフォルニアにいた時からの古い友達で、最近彼女と何度か会い、結婚することに決めました。」

これは幹部たちにとってうれしい驚きでした。ハンター会長がひとりであるのを心配していたからです。でもこれからは、外交的で温かく、親切で上品な伴侶がともにいてくれるのです。結婚してからは、イニッシ姉妹は絶えずハンター会長のことを気遣い、行き届いた世話をしています。旅行の同伴者を得て、偉大なハンター会長が担ったさまざまな割り当てと責任を果たしながら、教会の奉仕の奥行きを深さをいくらかでも彼女に見せられることは、ハンター会長にとって楽しみとなりました。彼女の方も、幹部の妻が味わうあらゆる喜びや感動を経験できましたし、教会の集会や宣教師の集会でたびたび話を依頼されるうちに、下準備ができないときでもりっぱに話をするすべをすぐに身につけることができました。こうしてハンター姉妹は、慰めと喜びを彼に与え続けているのです。

ハンター会長は、常に強い決断力を示してきました。1993年2月7日、彼はブリガム・ヤング大学のキャンパス

で、19のステーク部のファイヤサイドと教会教育部の放送番組のために話をすることになりました。マリオットセンターに集った約2万人のヤングアダルトに話をしようと立ち上がったところ、突然暴漢が現われ、ハンター長老を脅して「動くな」と叫びました。男は、爆弾と起爆装置を持っていると告げ、ハンター会長以外は全員立ち去るように命令しました。実際に多くの人が立ち去りましたが、ハンター会長はふたりの警備員とともに演壇に決然と立っていました。ピストルのようなもので脅されていましたが、ハンター会長は男が渡した声明文を読むことを断固として拒みしました。学生たちがだれからともなく『感謝を神に捧げん』(賛美歌11番)を歌いだすと、暴漢は一瞬気をそらしました。すかさず警備員が飛びかかり、男を取り押さえました。もうひとりの警備員が安全を期して、ハンター会長を床に伏せさせました。

もちろん、聴衆はかなり動揺しましたが、間もなく理性を取り戻し、静かになりました。ハンター会長はすぐに気を取り直すと、再びマイクロフォンに近づき、準備した話の最初の部分を読み上げました。「人生にはかなり多くのチャレンジがあります。」そこで



ハンター大管長は、1985年11月10日に十二使徒定員会会長代理となり、1988年6月2日に十二使徒定員会会長に任命された。新しい責任を受けてからは、以前ほどは旅行をしなくなったが、それでもなおソルトレークシティから離れた所で行なわれる教会の重要な行事に参加した。1991年、南アフリカで開かれた地区大会で会員や宣教師たちにあいさつするハンター会長夫妻。
(上)

口を閉じると、聴衆を見回して付け加えました。「ただ今、ご覧になったように。」そして、何事もなかったかのように、先を続けました。

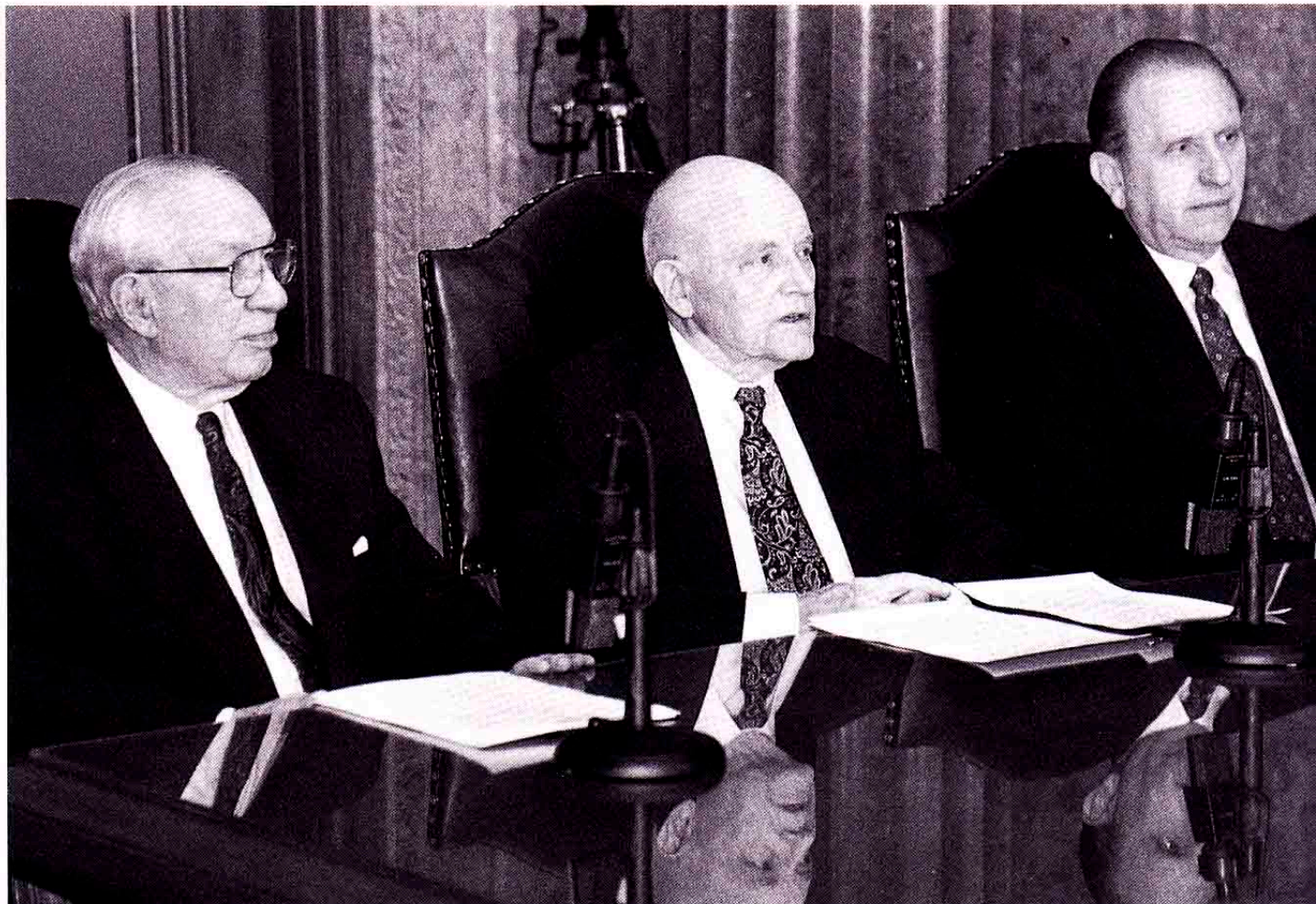
ハンター会長は演壇に立つと、驚くほどの落ち着きとごく自然な威厳を見せます。彼のメッセージは常に思慮深く、感受性に富み、慰めを与えてくれます。たとえば、1983年10月の説教の中で、ハンター会長は悩み苦しんでいる両親に次のような慰めを与えてくれました。

「りっぱな親とは、子供に愛を示し、犠牲を払い、世話をし、教え、子供の必要を満たす人のことです。もしこれらのことをすべて行なっても、子供が不従順で世のものを追い求め、手に負えないようであれば、それでも、皆さ

んはりっぱな親であると言えます。』¹⁷

彼の足元に座る特権にあずかった人人は皆、聖典に記されているように、彼の深い英知に「感心」します。¹⁸十二使徒定員会会長代理のボイド・K・パッカー長老は、ハンター大管長のことをこのように述べています。

「ときどき人々は私に、ほんとうのハワード・W・ハンターはどんな人かと尋ねます。『あなたは長年彼と一緒に働いてきたから、彼をよく知っているでしょう。彼はほんとうはどんな人なのですか。』その質問に対する私の簡潔な答えを聞けば、きっと皆さんもうなずけることでしょう。ハワード・W・ハンター大管長は、皆さんがご覧になるとおりの人です。物静かで、賢く、裏表のない人です。気持ちよく一



緒に働け、ユーモアのセンスに富んだ人です。彼ほど教会の教義やさまざまな手続きをよく知っている人はほかにいません。むずかしい決断を決して避けたことがなく、強い確信を持っています。私は彼について何らいぶかしさを感じません。ほんとうのハワード・W・ハンターは、まさに皆さんがご覧になるとおりの人です。」

1994年6月5日、十二使徒定員会会長を務めてきた、私たちがよく知り愛する気高いこの方が、教会の大管長として召され、支持され、任命されました。彼は、神の代弁者として、また地球の歴史上大いなるこの時代におけるすべての人類の指導者として、必要なすべての特質を備えています。彼は主に仕え、主の促しに従う忍耐強い人で

す。厳しくすべきときには厳しく、やさしくすべきときにはやさしい人です。機敏なユーモアのセンスの持ち主で、明るく温かみのある笑いを振りまきます。優れた記憶力と鋭敏な思考力を兼ね備えています。愛情あふれたやさしい夫、父親、そしておじいさんであり、だれからも好かれるおじいさんです。親切で、よい聞き手であり、ほかの人の必要に強い関心を持っています。この神権時代における主の予言者なのです。

彼が高齢であり、体力が衰えていることを心配している方に申しあげます。心配には及びません。彼の強い精神力、気力、そして霊的な力は損なわれておらず、むしろ以前より強くなっています。すべての人はオルソン・ハイド兄弟の次の言葉に啓発されるでしょう。

第14代大管長に聖任され任命された翌日の記者会見で、ハンター大管長は「世界のあらゆる地域の人々」へ彼の愛を伝え、「私たちが互いにもっと親切にし、もっと礼儀を尽くし、もっと謙遜で、忍耐強く、赦し合えるように祈っています」と述べた。記者会見で話すハンター大管長。ゴードン・B・ヒンクレイ第一副管長（左）、トーマス・S・モンソン第二副管長（右）とともに。

「人が民を導いていくように指名され聖任される時、その人はすでにさまざまな艱難と試練を乗り越え、神とその民の前に、その職に就くにふさわしいことを証明しているのである。…まだ試しを受けず、神と民の前に、また至高者の評議会の前に自分がふさわしいことを証明できなければ、出て行って教会と神の民を導くべきではない。…教会を導いていく人は、みたまと全能者の勧めを理解し、教会員を知っていて、教会員からも知られている人です。」¹⁹

聖典にはこのように書かれています。「大神権の職を管理する長たる者の義務は全教会を統轄すべきものにして、モーセの如くあるべし。すなわち、…この教会の頭首に神の与えたもうあらゆる賜を有し誠に彼は聖見者たり、啓示を受くる者たり、翻訳者たり、また予言者たり。」²⁰

聖典はさらに次のように教えています。「メルケゼデクの神権の大神権の大神長会は、当教会に於ける一切の職務を行う権能を有す。」²¹

主により支持され、また、間もなく大会で教会員により支持され、ハンター大神長は主の大祭司として、この末日の世にあって私たちを導いてくだ

さいます。イザヤが述べたように、「主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」のです。²²

ハンター大神長は、これまで私たちが知っている人の中で、最も愛情にあふれたキリストのような方のひとりです。彼の霊性の高さは計り知れないほど高いものです。長年主の特別な証し人として主イエス・キリストの導きの下で仕えてきたハンター大神長の霊性は、驚くべき方法で高められてきました。それは彼の全身にみなぎる力の源となっています。彼は神聖な事柄を静かに、また謙遜に受け止め、そうした事柄を慎重に語ります。また、すばらしい心の平安と落ち着き、そして、神の子供たちの中で際立って気高い心の持ち主です。彼がたびたび経験してきた大きな苦難は、この時代、この日、地上にあって神の清い器となり予言者となるための「精錬の火」だったのです。□

注

1. ジェイ・M・トッド「エンサイン」1994年7月号、pp. 4-5
2. イザヤ40:31; 箴言30:19参照
3. エレノア・ノールズ「ハワード・W・

ハンター」p.71参照

4. エレミヤ1:5
5. リチャード・ハンター「ハンター」ブリガム・ヤング大学「ルーベン・クラークロースクールにおけるハワード・W・ハンター教授の紹介パンフレットのための未発表略歴
6. ドロシー・ラスマッセン、著者との会話、1992年10月23日
7. 同上
8. 同上
9. 同上
10. リチャード・ハンター「ハンター」
11. エレノア・ノールズ「ハワード・W・ハンター」p.135
12. リチャード・ハンター「ハンター」
13. エレノア・ノールズ「ハワード・W・ハンター」pp.145-146
14. 同上pp.176, 229-231
15. ニール・A・マックスウェル「柔和と謙遜」ブリガム・ヤング大学1986-87礼拝集会とファイヤサイドでの説教、p.61
16. 「エンサイン」1987年11月号、p.54
17. 「子供を思いやる両親」「聖徒の道」1984年1月号、p.114
18. ジョセフ・スミス訳マタイ8:9
19. 「説教集」1:123
20. 教義と聖約107:91-92
21. 教義と聖約107:9
22. イザヤ40:31

吟味して得た証^{あかし}

ウィリアム・G・ダイヤー

子供のころ、私たちの小さな支部では、聖典を読むことはそれほど強調されていませんでした。また、自分専用の聖典を持てるほど裕福な若人もほとんどいませんでした。私もモルモン経を読むとしますが、いつもニーファイ第一書を読み終えることさえできない有り様でした。いつかもっと読まなければいけないという気持ちはありましたが、真の動機づけが得られたのは伝道に出てからでした。

伝道地に着いて2週間後、同僚からある家族と会ってレッスンをする約束になっていると知らされました。新米の宣教師だった私は同僚に言いました。「話す方は全部お任せします。私はもっぱら心の中で応援してますから。」

その夜、私たちは人でいっぱいになった質素な家で、その家族と彼らの友人たちに会いました。私は大きなだるまストーブの後ろに、ほとんど人目につかないような席を見つけて腰を下ろしました。同僚がレッスンをしましたが、そのメッセージが彼らによく伝わって受け入れられているのははっきりとわかりました。私は満足し、誇らしく感じました。私たちは、翌週もう一度会う約束を作ることができました。

次に訪問した時、初めて来た人がいるのに気づきました。スーツを着た大柄な男性でした。紹介によれば、彼はその家族の集う教会の牧師らしく、自分の教会の信者に私たちが何を教えて

いるのか聞きに来た、と言いました。彼の風格におじけづいた私は、ストーブの後ろの例の席にさっと引っ込んでしまいました。

この日も同僚がレッスンを始めました。しかし今度は、この牧師に何度も話の腰を折られてしまいました。同僚の話す一つ一つの事柄に牧師が疑問を投げかけ、ほかの聖句を引用しながら異議を差し挟むのです。私は何の支えにもなれませんでした。同僚がようやくレッスンを終えると、牧師は立ち上がり、私たちを非難して言いました。「君たちが教えているのは悪魔の教義だ。とっととユタに帰って、この人たちを欺いたことについて主に赦しを請いたまえ。」私は動揺し混乱しました。その夜はほとんど眠らず、ある固い決心をしました。私は自分の教えていることが真実かどうか知らなければなりません。もし真実でなければ、自分がほんとうに信じてもないことに2年間を費やすなんてできないと思ったのです。

次の日、私は生まれて初めて熱心にモルモン経を読み始めました。毎日あらゆる機会をとらえて読みました。そして初めてニーファイ第一書を読み終えたのです。私はニーファイの受けた試練やレーマン人との戦争の物語に夢中になりました。ヤコブやイノス、ベンジャミン王、アンモン、アルマ、

モーサヤなど、モルモン経の前半に登場する偉大な予言者たちについて学びました。

そしてアルマ書の後半に進みました。私はアルマが息子のコリア



ントンにした説教を我を忘れて読みふけりました。それから贖罪に関するアルマの説明を読みました。今までこれほどはっきりとしてわかりやすいものを読んだことはないと感じました。それは私の知と情に訴えかけたのです。まるでみたまが私の理解力を超えたことを教えるために心を開いてくれたかのようにでした。正義と憐れみの律法について理解を深め、それまで以上に救い主が確かに世の贖い主であるとわか

りました。

モルモン経を読み終えて、私は自分の教えているイエス・キリストの福音が真実であることを知り、主を代表する宣教師であることを誇りに思いました。以来、モルモン経を通して得られたこの証は、人生の大きな支えとなっています。□



MANN

主の羊の群れに戻る

ピセンテ・ムーニョス・ウヨア

妻のセシと私には、かつて、教会に定期的に通わなくなった時期がありました。しかし、私たちは教会に行かないことを寂しく感じるようになり、やがて、ふたりが主の羊の群れに戻ることを天父が許して下さるかどうか知るために、断食して祈ることにしました。

ほどなくして、私が個人の祈りを捧^{こた}げていた時に玄関のベルが鳴りました。それはピノス支部長でした。彼は私に、副支部長になってもらいたいと頼みに来たのでした。こうして私の祈りはこたえられ、私は、天父がまだ私をご自身の息子として愛してくださっていることを知ったのです。私は神からのみ与えられるあの温かな気持ちを感じました。

これが、霊的な祝福に満ちたすばらしい年の始まりでした。まず支部で、教義と聖約のインスティテュートのクラスが始まりました。セシは私に、そのクラスに出席するつもりなら協力すると言ってくれました。数カ月後、私はそれまでの講師の後任を引き受けるよう依頼されました。

ある日、神殿結婚と死者のための身代わりの業についてのレッスンをしました。それから何日かして、夜、夢を見ました。19年前に亡くなったおじと、同じく他界していた継父に会ったのです。ふたりとも私に何かをしてもらいたいようでした。すると、神殿に行かなければならない、神殿結婚は神の戒めである、と何かが私にささやくのを感じました。

私は目を覚ますと、ひざまずいて、私たち家族が神殿に行けるようにしてくださいと天父にお願いしました。それから、自分の決意を固めるため、紙を取り出してたった今捧げた祈りを書き留めました。「天のお父様、もしみこころにかなうことでしたら、妻のセシや子供たち、

ディエゴとアドリアニータとともに神殿に行かせてください。」私は妻を起こすと、自分がしたことを話しました。すると妻は泣きだし、私を抱き締めました。妻はこの目標の達成がどれほど困難か知っていたのです。

私たちはエクアドルのアンバトに住んでいたのです、最も近い神殿は、国境を越えたペルーのリマにありました。そこに旅行するためには、たくさんの書類を準備し、36時間バスに乗り、そしてかなりの経済的犠牲も払わなければなりません。旅行の経験がなく、そのうえとても活発な子供たちにもつらい思いをさせることは目に見えていました。しかし、祝福師の祝福を受けた時、私たちの決意は強められました。

1987年5月20日、妻と娘、息子、そして私は、ついに神殿を目にしました。神殿の尖塔のひとつには天使モロナイの像が立てられており、天を見上げていました。妻と一緒にエンゲウメントを受け、また子供たちと永遠に結び固められた時、至上の喜びを感じました。続いて私たちは、愛する人々のために身代わりの儀式を受けました。

この経験を思い出すたびに、私はもう一度神殿に行きたくなります。これらの永遠の誓約を交わす機会を失わずに済んだことに深く感謝しています。神は私たちを愛していらっしゃるのです、神殿の儀式を含む主の福音を回復してくださいました。私は、神が生きておられることを知っています。□

ムーニョス家族。左からピセンテ、アドリアニータ、ディエゴ、セシ。





PHOTOGRAPH BY HARRY BOHLER

心にできた 鉄の壁

アースラ・フィッシャー

私 は1929年にドイツのマイセンで、ごく普通の両親の元に生まれました。父は、長い間失業しており、母は工場に勤めていました。第二次世界大戦が始まると、父はすぐに軍隊に召集され、1945年には捕虜となってしまいました。

両親の結婚生活はうまくいっておらず、父が戦争から帰還した1947年、離婚してしまいました。この時から私の生活はすっかり変わりました。

私が18歳の時、父はひとりで暮らすと言って、アパートを出て行きました。私は母と一緒に住みましたが、たびたび衝突しました。家庭の中での親切やぬくもり、思いやりといったことは、私には縁遠いものでした。私は、調和の取れた生活を送ることに対して、次第に希望を失っていきました。全力で仕事に打ち込むよう努めました。そこから人生のほんとうの意味を感じることはできませんでした。時の流れとともに、私の心の周りには鉄の壁が築かれていきました。

1991年に母が亡くなった時、子供のころの心の痛みが再び洪水のように押し寄せてきました。迷子になったような寂しさをまた感じたのです。

それからちょうど2カ月後、宣教師が私を見つけてくれました。物静かなその話し方には、親切で温かい心、そして思いやりが感じられました。ふたりから発せられるみたまの力は、鉄のように固く閉ざされた私の心を通しました。こうして私は、1991年11月11日にバプテスマを受けました。

その時以来、私の心に平安が宿るようになりました。祈りを捧げ、心を聖典の言葉で満たし、知恵の言葉に従って生活できるようになりました。もちろんこれからも学ぶことはたくさんあるでしょうが、何でも喜んで実践していこうと思います。なぜなら、天父が日々私とともにいてくださり、助け導いてくださると知っているからです。私はついに平安を見いだしたのです。

□

聖典から学ぶ——生涯続ける研究

モルモン経の冒頭の3節の中で予言者ニーファイは、自分は福音の真理を学び、そして書く者であるとして、次のように述べています。「私すなわちニーファイは……父の知っていたすべての学問の中からいくらかの教えを受けた。……まことに神の恵みと神の奥義とを深く知っているから、私は今一生の中にしたことを記録する。……これを自分の手で書き、自分の知っていることに従って書くのである。」(Iニーファイ1：1-3)

ニーファイは先祖の用いた言語に精通していたので、先祖の記録を読み、神が民をどのように導いたかについての話を私たちに伝えることができました。ニーファイのように私たちも、聖典を自分で読めるように、読み書きの能力を身につける必要があります。

残念なことに、教会員が皆、読み書きという欠かせない能力を持ち、その力をじゅうぶんに活用しているとは限りません。このような訳で、中央扶助協会会長会は世界じゅうの扶助協会の姉妹たちに、教会員が読み書きできるようにするという目標を設定しました。ある人々にとってこの目標は、基本的な読み書きの能力を身につけるために、社会的、文化的、個人的な障害を乗り越えることを意味するでしょう。またほかの人々にとっては、自分の能力を活用して、一層忠実に聖典を勉強し、さらにほかの人が福音学習の能力を身につけるのを助けることを意味するでしょう。



ILLUSTRATED BY NANCY SEAMON CROOKSTON

私たちは福音学習の能力を身につけ、ほかの人がその力を身につけるのを助けることができる。

アフリカのジンバブウェの訪問教師、メイブル・クーマロ姉妹は、訪問先の姉妹が教会に来なくなったのを心配していました。その姉妹が、聖典やテキストを読めないことに当惑してしまったのが原因でした。クーマロ姉妹と同僚は、彼女が教会を通じて受講できる読み書きのクラスに参加するよう手助けしました。そのクラスのことを聞いた姉妹は、感嘆の声を上げて喜びました。「クーマロ姉妹、とうとう私の夢がかなったのね。」

もうひとりの訪問教師、プリシラ・サムソンデービス姉妹は、バスで町外れに住む姉妹をよく訪問します。彼女はこう言っています。「訪問先の姉妹は字が読めないので、行くといつも聖典を読んで差し上げるんです。」

ユタ州サンディーのある姉妹は、数年間教会に出席していない自分の家庭

訪問の同僚の悩みを知りました。彼女は、自分自身の証を得たいと思い、モルモン経を読もうとするのですが、なかなか読めなくて困っていたのでした。ワード部の扶助協会の会長は、同じような悩みを持っている姉妹がほかにもいることを知りました。そこで、監督の指示の下に、ワード部の関心のある姉妹ならだれでも参加できるモルモン経のクラスを1週間に1度、扶助協会で開催することにしました。クラスを教え、話し合いを指導する姉妹が召されました。彼女はこうに述べています。「クラスの姉妹一人一人の生活が変わってきました。モルモン経が真実であることを疑っていたある姉妹は、強い証を得て、神殿の祝福を受けました。福音の基本的な原則を理解するのがむずかしかったある年輩の姉妹は、今では新しい聖典をそろえ、確信を持って勉強しています。」

世界じゅうの姉妹たちが指導者の勧告を心に留めて、聖典を勉強し研究するにつれて、私たちはニーファイの次の言葉をより深く理解できます。「私の身も心も聖文を喜ぶので、私が心にそれをよくよく考えて私の子孫たちの学問と利益とになるようにこれを書き誌すのである。」(IIニーファイ4：15)

●あなたの生活の中で、聖典の勉強をもっと充実させるにはどうしたらよいでしょうか。

●周囲に、福音学習能力を身につけられるよう、私たちが力になれる人はいないでしょうか。□



たった一度だけ、 たばこやお酒を試すのはいけませんか

たばこやお酒が実際にどんなものか知るために一度だけ試すのが、なぜいけないのですか。二度とするつもりはありません。一度試すだけで書があるのでしょうか。

本誌の答えは問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

回 答

おそらく、あなたは答えを聞かなくても自分自身でわかっているでしょう。たとえ一度だけでも、人を破滅に追いやる習慣性のあることはしない方がいいのです。アルコールやたばこを試してみたところで、分別がつき強くなるわけでもありません。正しいことを行なう方がずっと多くを学べます。

一度でも誘惑に屈したら、同じ誘惑に何度も悩まされます。あなたが、たばこもお酒もしないと言っても、人は信じないかもしれません。あなたが一度誘惑に負けたことを知って、また同じことを繰り返すと思うでしょう。

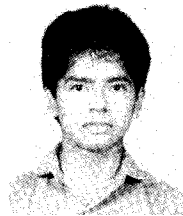
だれにも知られないように試しても結果は同じです。友達を裏切ることではないかもしれませんが、実際は自分を裏切ることになります。正しい選択ができるかどうか自分を信頼できなければ、生きることに恐れを感じるようになるでしょう。教会の指導者が正しい選択をするように話すのを、今までに耳にしてきたはずです。なぜ彼らの知恵と勧告を信じないのでしょうか。

世界じゅうの読者の皆さんが送ってくださった非常に多数の手紙の中から、いくつかをご紹介します。

読者からの提案

たばこやアルコールを試すべきではないと思います。次の理由からです。

- (1) バプテスマを受けた時、この世的な生き方を捨てると決意したはずですが。
- (2) 天父や御子イエス・キリスト、また知恵の言葉の賜に対する感謝をじゅうぶん示していないことになります。
- (3) 肉体的にだけでなく霊的にも自分を汚すことになり、ほかの誘惑も受けやすくなります。
- (4) 救い主の真の弟子は、神と自分との関係を傷つけることは決してしません。私自身、知恵の言葉やほかの戒めを喜んで守っています。そうすれば天父と自分との間を遮るものは何もありません。



ペルー、リマ、
マグダレーナス
テーキ部
プエブロ・リブレ
ワード部
マーティン・F・
アラマ・ソノ
(16歳)

アルコールやたばこが体に害を与えることは、だれでも知っています。それでもたばこやアルコールを常用する人は、病気にならないとやめようとしません。私はたくさんの人がいろいろな理由でアルコールを試飲するのを見てきました。興味本位で、ストレス解消に、あるいは問題を「忘れる」ためになどです。いずれにせよ、結局彼らは健康を危険にさらし、好ましくない場所で好ましくない人々と交際するようになってしまいました。

アルマ書第37章35節にはこう書かれています。「わが子よ、忘れずに青年の時智慧を得よ。青年の時から神の命令を守ることを習慣とせよ。」私は改宗者なので、信仰のあつ家庭に生まれ、幼い時から主の道を教えられて育った青少年をうらやましく思います。もっと早く教会に出会っていたらどんなによかったらと思うます。でも私は、イエス・キリストの福音と、「智慧を得」られるように助けてくれた会員たちに感謝しています。



韓国、
釜山
釜山西ステキ部
キムハニ
金海支部
リーサンレイ
李相來

私は父から「たった一度だけ」試すとどうなるか、見せてもらったことがあります。

父と私は機械技師です。ある日私は

父から、普段の作業着の代わりに白いシャツを来て仕事に行くように言われました。私は、できないと言いました。油や鉄粉でシャツはひどく汚れると思ったからです。「だいじょうぶ、だいじょうぶ、たった1日だけなんだから」と父は言います。しみや汚れが落ちなくなってしまうからいやだと私は言い返しました。その時父は、アルコールやたばこを「たった一度だけ」試すことも白いシャツで仕事に行くのと同じだと教えてくれました。アルコールやたばこを試すだけなら体に害はないかもしれないが、たとえ一度だけでも霊は汚されると。

罪は油汚れのようなものです。一度ついたらなかなか落ちません。悔い改めはできても、簡単ではありません。罪は犯さない方がよいのです。たった一度でも、どんな小さなものでもです。



ブラジル、
キャンピナスステ
ーキ部
キャンピナス第4
ワード部
ファビオ・マクシ
モ(20歳)

一度試すだけではたばこやアルコールがどんなものかほんとうにはわかりません。ほんとうに知ろうとして何度も試すうちに、抜け出せなくなるのです。

たばこやアルコール(または麻薬)の試し飲みは愚かなことです。害があるとわかっていながら(だれもがそれを知っています) どうして試す必要があるのでしょうか。試して経験できるので、のどの痛み、せき、めまい、吐き

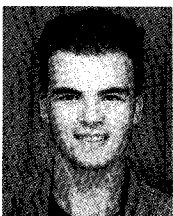
けぐらいで、もっとひどい目に遭うかもしれません。こうした症状はたばこやアルコールが体に有害であることを教えているのです。



フィリピン、
マニラステーキ部
サンタ・メイサ
ワード部
ウインストン・
L・セルバンテス
(24歳)

たばこやアルコールを飲まなくても、それがよくないことはわかります。たとえば、私が軍の観測員として働いていた時、仲間たちが体を壊すまで飲酒にのめり込むのを目にしました。彼らの姿を見ればアルコールがどんなに深刻な影響を与えるかわかります。自分で実際にしてみなくても、それがどうなるかは予測できるはずですよ。

私たちが知恵の言葉やそのほかの戒めを守っているかぎり、みたまが心を照らし、善悪を見分けることができるのです。



フランス、
ナンシー
エマニュエル・ト
マドン(19歳)

たばこやアルコールを含め、危険で有害なものを使ってみようと思えるだけでも愚かで危険です。何かをしようと思うだけですでに一歩踏みだしている、後は簡単に実行するようになります。たばこやアルコールを一度始めて

しまったら、やめるのはとてもむずかしくなります。そうなれば自分ばかりか、あなたを愛する周囲の人も傷つくでしょう。

天父はすべての子供たちを愛していらっしゃる。あなたが誘惑を避けられるように祈れば、きっと祈りにこたえ助けを与えてくださるでしょう。ドイツ、デュッセルドルフステーキ部ケルン第1ワード部
リー・カルタ(15歳)

「一度だけ」たばこやアルコールを試せば、サタンはまたそうするようあなたを絶えず誘惑するでしょう。

堅固な防波堤は大きな波も食い止めますが、小さな割れ目が入っただけで、絶え間ない波の攻撃を受けてついに崩れてしまうでしょう。



台湾桃園^{タオコワン}地方部
桃園第2支部
チェンシユエフ
陳淑華(24歳)

私は高校時代、学内でも学外でも、たばこを吸う人やアルコールを飲む人とは交際したくないと思っていました。違う学校の友達からこの世的なパーティーに誘われたこともありましたが、断りました。私は光となり模範となって、世にあっても世のものとならずに生きられることを、友達に示したかったのです。

私の模範は同年代の多くの友達の助けになり、彼らは今、宣教師や教会のすばらしい働き手になっています。

私はいつも「猛火も小さな炎から」という言葉を忘れないようにしています。



トンガ、
ヌクアロファ南ス
ターキ部
ハベルロツ第2
ワード部
ポンジーア・パー
カー(21歳)

あなたの気持ちはよくわかります。私は何でも自分でやってみないと気が済まないたちで、数年前たばこやアルコールを試しに飲んでみた方がいいのではないかと考えたことがあります。

でも、私たちが従順であることを主に見ていただくには、戒めを守って生活するしかありません。主は私たちの日々の行ないをよく知っていらっしゃいます。大切なのは主に忠実であることによって、主に愛を示すことだと思います。

日本、北海道
厚別ワード部
桑名代江(29歳)

たばこの中毒に陥っているさまざまな年代の人、100人を対象に私が行ったアンケートの結果をお知らせしましょう。

なぜたばこを吸うようになったのかという問いに対して、3パーセントの人が「皆が吸っていたから」、11パーセントの人が「刺激が欲しかったから」、5パーセントの人が単に「そうだったから」と答えています。残りの81パーセントの人は「興味本位で」喫

煙するようになったと答えました。このことから何がわかるのでしょうか。

その中のひとりの女性はたばこをやめたいと思っていることを話してくれました。「自分がどんなふうになるか最初からわかっていたら、たばこに触れるようなことは興味本位でもしなかったでしょう」と。またたばこは「品位を下げ、お金がかかり、命を縮めるものだ」とも言っていました。

知恵の言葉を破ると、自分の肉体だけでなく霊も傷つけることになります。神の戒めのひとつを破ることだからです。教義と聖約の第89章に記されているとおり、神の律法に従いさえすれば受けられると約束されている祝福の数々を、思い起こしてください。



メキシコ、
ベラクルス・レ
フォルマステーキ部
ヌエバ・エラワー
ード部
ローザ・エレナ・
モンタルボ・マル
ティネス(20歳)

世の中には「一度だけ試してみよう」と言って、結局はアルコールや麻薬の犠牲者になった悲惨な人々があふれています。年若い私たちには、イエス・キリストの福音をじゅうぶんに理解していないときがよくあります。ですから、興味をこの世の事柄に向けるのをやめて、聖典をもっと理解し、理解を求めて祈り、教会の指導者の勧告に従うことに、エネルギーを使う必要があると思います。

知恵の言葉を守る私たちに主が与えてくださった、「さつりくの天使は…

…彼らを過ぎ越して^{ほよ}屠ることなかるべし」(教義と聖約89:21)という約束を、いつも心に留めてください。



チリ、
ビニャデルマルス
ターキ部
ヌエバ・アウロラ
ワード部
マリア・ユーヒニ
ア・ラミーレス・
レイエス(22歳)

下記の質問に対する皆さんの意見をお待ちしています。締め切りは1994年11月1日。あて先は下記のとおりです。

QUESTIONS AND ANSWERS
International Magazines
50 East North Temple Street
Salt Lake City, Utah 84150
U.S.A.

氏名、年齢、住所、所属ステーキ部/地方部、ワード部/支部名を明記のうえ、日本語で意見をお寄せください。こちらで翻訳いたします。手書き、ワープロ、いずれも可。できれば写真を同封してください。ただし返却はいたしません。匿名を希望する場合は、その旨を明記してください。お便りがすべて採用されるとは限りません。あらかじめご了承ください。

質問——教会に出席していて、話者が「きょうはみたまを強く感じます」と話すときがあります。私は何も感じません。彼らはただ想像して言っているのでしょうか、それとも私に何か問題があるのでしょうか。□

み手に守られ

テオドルス・G・パールマン

ILLUSTRATION BY DOUG FAKKEL

降りしきる雨の中、乗用車や大型トラックの長い列が、高速道路のぬれた路面を音を立てながら疾走して行きます。猛スピードのトラックはどれも、車輪の下から大量の水しぶきを背後に飛ばして、水の幕を残していきます。私たちの車は、路上の巨人のようなこれらのトラックを1台でも追い越そうとするたびに、水しぶきの幕で視界をふさがれてしまうのです。

私たちの前に車の長い列ができると、この巨大な乗り物と、しばらく並んで運転しなければなりません。私たちの車からわずか2、3メートルの所でごう音を立てて走る怪物を、妻は恐怖で震えながら見上げていました。

出発を非常に遅らせてしまい、約束の時間に間に合うためにこの危険な天候の下で急がねばならなくなったことを後悔しました。



突然、車の横から「キッ、キッ、キッ、キーツ」という、奇妙な音が聞こえました。まるで、「運命がドアをノックする音です」とベートーベンが言った、あの交響曲第5番の最初の4拍のように、私たちの耳には聞こえました。その音は何度も何度も繰り返されました。

非常駐車帯に駐車し、タイヤと車体を調べてみました。しかし、あの異様な音を引き起こしている原因は何も見つけられなかったのです。運転を続けました。何キロか行くと、また同じ音が響きました。再度、車を止めて調べてみましたが、その時も異常は見当たりませんでした。ところが、3度目に調べた時、ついにあるものを発見しました。タイヤのひとつにこぶができていて、徐々に、やしの実ほどの大きさにまでなっていたのです。

タイヤを交換にやって来た自動車整備士は、タイヤの内部を調べ、ぞっとしたような表情になりました。タイヤは新品でしたが欠陥品で、内部に大きな亀裂が生じていたのです。「この状態では、もう1キロも走らせることはできなかったでしょうね。タイヤがパンクしてしまったでしょうから」と整備士は言いました。

もしあの巨大なトラックの隣を走っている時にパンクしてしまっただうなっていたことかと思うと、背筋が寒くなりました。その日、私たちが日々の祈りの中でしばしば願い求めている守りの力をはっきりと感じました。

何年か後のあるあらしの晩、私はその守りの力を再び感じました。私たち夫婦もだんだんと年を取り、少しばかり物忘れをしやすくなっていました。家の外では風が荒れ狂い、ドアや窓に吹きつけていました。しかし、家の中は静かで安全でした。私たちは暖かくして心地よく眠りに就きました。

翌朝、目覚めてから朝の祈りを捧げ、階下に降りました。台所に入った私たちは、肝をつぶしました。強烈なガスのおいが漂っていたのです。そして、いつもはちゃんと閉めている台所のドアが開け放たれていました。ドアに鍵をかけなかったことに気づかずに、ガスコンロのつまみを開いたままで、部屋を出たのです。しかし、さいわいにもあらしの強風がドアを開けてくれたのです。もしドアが開いていなかったら、ガスはきっと湯沸かし器の種火に引火し、大きな爆発を引き起こしていたことでしょう。

私たち夫婦はあまり賢明な者ではありません。神殿で結婚した時に、天父と交わした誓約を守ろうと努力している、どこにでもいる一夫婦にすぎません。しかし、守られていると感じています。おそらく、自分たちが気づいている以上に何度も何度も守られてきたことでしょう。災いから2度までも救ってくださったのは天父のみ手であつたと、私たちは心から信じています。□



敵兵の日記

スチーブン・G・ピッドルフ

奇妙に思われるかもしれませんが、私が平和で幸福な人生を送る秘訣を知ったのは、ベトナム戦争のさなかでした。そのころの私は2カ月間ずっと前線で戦っていたので、肉体的にも精神的にもかなり参っていました。家族からの便りも戦地まではほとんど届かず、週ごとに靈性を鼓舞してくれるはずの聖餐会や日曜学校もありませんでした。靈的な力を得る源といえば、ただ祈ることだけで、毎日孤独と寂しさを感じていました。

戦いに明け暮れ、ばたばたと人が死んでいくのを見ているうちに、だんだんと心がすさんで何も感じなくなっていました。自分がまるである時期のニーファイ人の戦士のようになって、敵の血に飢え渴いているような気がしました。(モルモン3：9参照)

1972年7月9日のことです。私たちの隊は1日じゅう進軍を続け、襲撃されたばかりの小村にとどまることになりました。焼け崩れた家々が、暮れかかる夕日の中でくすぶっていました。すぐ近くの野原には若い北ベトナム兵の死体が転がっていました。何か機密情報はないかと着ている服を探りながら、私は冷淡な目でその死体を見ていました。

その兵士の服から何枚かの紙が見つかり、隊長の手に渡りました。結局の

ところ、その紙には何の機密事項も書かれてはいませんでした。しかしそれが日記だったことを聞いて興味をそそられました。こんな状況の中でよく日記をつけられたものだと驚いたのです。この兵士は最期にはどのような思いを書き残したのでしょうか。

その晩、この日記の簡単な翻訳文が手に入りました。揺らめく小さなたき火の傍らで、私はその日記を読みました。

「今、自分たちはどこにいるのかもわからない」と書きだしてあります。「我々は故国を侵略したアメリカの帝国主義者たちと勇敢に戦っているのだ」と将校は言う。確かに我々は勇敢に戦っている。しかし配給はほとんど来ない。孤独だ。遠く離れてしまった家族に会いたい。みんなどうしているだろうか。ああ家に帰りたい。早く山に帰って森の中を歩き回りたい。もう一度、ふるさとの花や鳥や動物が見たい。」

私はそこに書かれた言葉に驚き、しばらくの間じっと紙を見詰めていました。それは敵の言葉ではありませんでした。私と同じ思いを抱いた人の言葉です。文化的、民族的、政治的な背景の違いという解決困難な問題ゆえに、たまたま敵国の人間としてにらみ合うことになっただけで、精神的にはほん

とうの敵ではなかったのです。もしも違う境遇だったら、同胞として出会えたことでしょう。

そう思った途端、ベトナム戦争は真の戦争ではなく、私もともに戦う兵士たちも真の戦士ではないのだと悟りました。真の戦いは、最初にルシフェルが天上で起こしました。地上での真の敵は北ベトナム人でも、どこの国民でもありません。全人類に対して、無知と靈的な束縛をもたらす戦いを挑んでいる、目に見えない悪の力こそが私たちの真の敵なのです。

真の戦士はイエス・キリストの旗の下で戦います。この戦士たちは人を殺したり物を破壊したりはしませんが、代わりにイエス・キリストの功德と回復された福音の知識によって、人を癒し、永遠の命を与えます。

あの日、私はベトナムの地でたき火のそばに座りながら、ほんとうの幸福と平和はどこからもたらされるのかを知りました。民族や宗教、政治的見解とは関係なく人間の尊さを理解すること、また、だれもが天父の子供であると知ることから幸福と平和が得られると気づいたのです。それがわかれば、きっとすべての人を愛せるようになるでしょう。たとえ相手が敵として目の前に現われたとしてもです。□



ティカルにおける
神殿と証^{あかし}

文・写真/マービン・K・ガードナー



いくつもの壮大な神殿が、ジャングルの中から天に向かってそびえ立っています。昔の人々の静かなさやき声が、部屋や廊下、中庭、また急勾配こうばいの石段にしみ込んでいるかのように思われます。この場所には驚異と神秘があるのです。

ここはティカル、かつてマヤ族の都市として栄えた所です。マヤ文明が滅

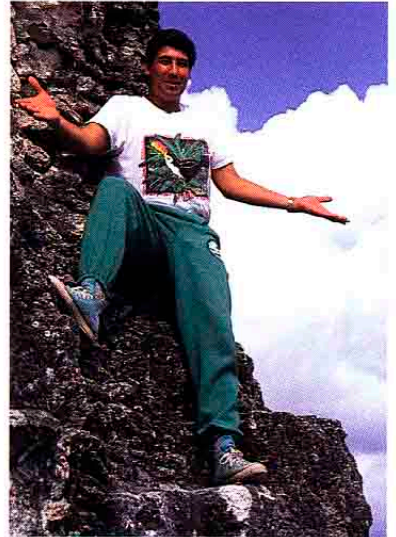
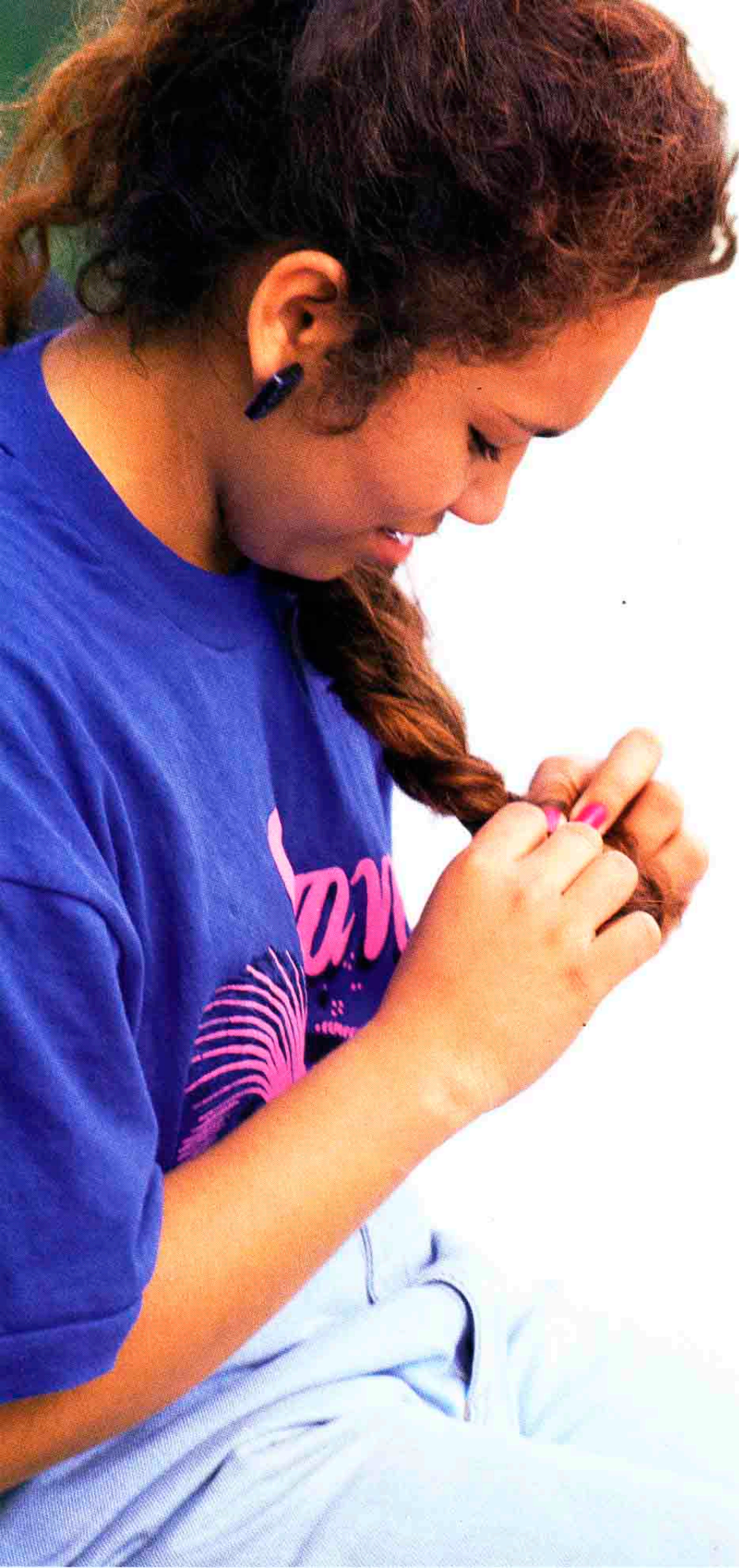
びると、ティカルもそれとともに滅びてしまいました。そして、雨が絶えることのないグアテマラの熱帯雨林の中にすべてを覆い尽くされ、この都は埋もれてしまったのです。ところが今日、ティカルのピラミッドと宮殿のいくつかが、この地のそのほかの神秘とともに、私たちの目の前にその覆いを取り払われ、私たちの疑問に答えることと

なったのです。

人里離れた地

古代の民はここティカルで礼拝をしていました。そして今、近くに住む末日聖徒の若人は、都の城壁の上からニーファイ人に予言したレーマン人サムエルの劇を演じるうえで、ティカル





ティカルは、モルモン経の物語の劇をするには格好の地である。演じられていることの意義を知る者には、一層真に迫って伝わってくる。また、ここにいるだけで、静かなめい想へと自然に導かれる。

が理想的な場所であることを知るので
す。搭の頂から教えを説いたベンジャ
ミン王や、邪悪なノア王の前で証を述
べたアピナダイの劇についても同じこ
とが言えます。ここは、昔の予言者や
現代の予言者について語るにつれ、心
を高められる場所なのです。過去の神
殿や現在の神殿、埋もれてしまってい
る真理や今ある真理、土の中から語る
予言者の声についても同様です。

ほかの訪問者たちの注目を浴びることのない人里離れた地で、11人の末日聖徒の若い女性が集会を開きました。そこには指導者たちと、ひとりの少女の兄弟が同行しました。彼らは近くのサンベニートからやって来たセミナーとインスティテュートの生徒で、

ティカルの神秘を探るために、朝の時間を一緒に過ごしたのです。一行は途中の道で野生のくじゃくやおおやまねこを見ました。そして、長い石段を上りました。(ある少女は無邪気にこうつぶやきました。「ここにエレベーターを付けた方がいいわね。’)皆で、古代のマヤ族の建造物の頂から地平線を眺めました。果てしない大海原のように熱帯雨林が広がっており、また数々のほかの神殿が、穏やかな緑の海に浮かぶ大きな船のように木々の上に突き出しています。

心が高められる、充実した1日でした。若い女性たちは、燃えるような太陽を避けて古代の宮殿がつくる日陰に入ります。その石造りの中庭で休息を取ると、自分の気持ちと証を分かち合うことにしました。みんなは静かに、『感謝を神に捧げん』を歌い、それからひとりが祈りを捧げます。

「この場所の近くに住むことができずで幸せです」と、ある若い女性が敬虔な思いで語ります。「ここは私たちの先祖にとって特別な場所でした。」ほかの人々もそれに同意し、ティカルの遺産と教えに敬意と感謝を表わします。

もうひとつの神殿

古代の神殿に囲まれ、その地の雰囲気満喫した末日聖徒の若い女性たちは、自分の国にあるもうひとつの神殿に自然と思いを寄せたようです。はるか遠くグアテマラシティにある神殿です。

「私たちの家族はつい先ごろ、生涯の夢をかなえられました」と、エッセニア・デルパーエ(18歳)は言います。「神殿で結び固めを受けたのです。家族全員が結び固められたのですから、これからは永遠の家族としてともに暮

らしていきたいと願っています。」

このグループの若い女性はひとり残らず皆、グアテマラシティにある神殿に行き、両親との結び固めや死者のためのバプテスマを受けています。数年前に、支部の青少年はグアテマラシティへ15時間のバス旅行をして、バプテスマを受けたのです。「死者のためのバプテスマを受けることで、悔い改めて復活に備える機会を亡くなった人々に与えることができるんです。その後、それを受け入れるかどうかは彼ら次第です。神殿ではみたまを感じます。安らぎを感じます。そこを立ち去りたくないという気持ちになります。神殿は特別な気持ちを感じさせてくれる場所です。美しい所です」と、ソイラ・デルパーエ(17歳)は語ります。

クレイリー・バルデス(17歳)はこう言っています。「私は神の教会の一員であることと、神殿で両親に結び固



められたことを、天父に感謝しています。福音を知っていることはこの世で最も大切なことであり、それによって、私たちは永遠の生命へと導かれるのです。」

最近伝道から戻って来たばかりで、今はセミナーの教師をしているルー

ビー・モンソン (24歳) は、このように語ります。「私が14歳の時、母は死にました。それは家族にとって、とてもつらい出来事でした。私は孤独を感じながら、よくひとりで家にいたものです。ある時、泣いていた私に語りかける声が聞こえました。あなたはひとりではない、主がともにいて助けようとしてくださっていると、その声は告げました。この声に気持ちは落ち着き、心が和らぎました。以来、私は平安を感じています。主が私を愛し、いつもともにいてくださると知ったからです。」



母親が亡くなって3年後、ルービーと家族はグアテマラシティ神殿で結び固めを受けました。「永遠の家族となれるように天のお父様が与えてくださった機会に感謝しています。私は、

従順であれば、いつまでも母や父、弟や妹たちと一緒にいられることを知っています。私は母のことをよく考えます。もうしばらくすれば、私たちはまた全員一緒にいられるのです。」

ルービーの妹ラケル (22歳) は、神殿で結び固めを受けるためにグアテマ

ラシティへ行った時に、家族と一緒に祝福師の祝福を受けたことを思い出して、こう話します。「受けた祝福がとても助けになっています。祈りと聖典の研究と断食によって、また母がまだ生きていた時に与えてくれた勧告に従うことによって、私が正しい決断を下し、忠実に信仰生活を送っていると、祝福は告げています。」

「真実の神」

ここがほかに類のない背景を持つ場所であるということを除けば、ティカルでのこの集会は、末日聖徒が集まって感謝や証を述べる全世界の数多くの同様の集会と変わりません。若い女性たちが、愛に満ちた天父や、救い主と

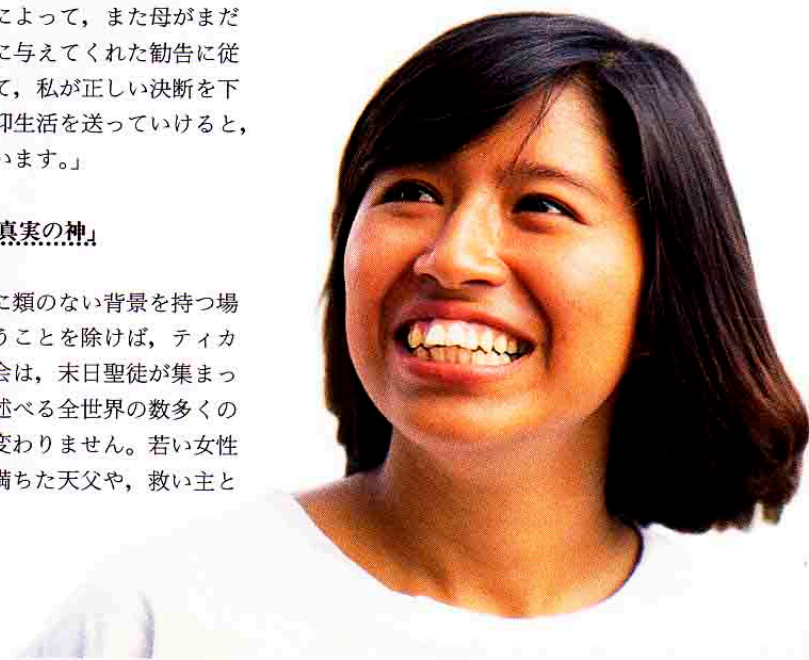
その贖罪、生ける予言者と回復の業に対して感謝を述べるとき、感動に満たされとめどなく涙があふれます。

「私は、天父が目的をもって私たちを地上に送ってくださったことを知っています」と、カーラ・モンソン (17歳) は語ります。「私たちの罪を贖うために天父が御子を送ってくださったことに感謝しています。天父が福音と教会を与えてくださったので、私たちは成長して、みもとに帰ることができるのです。」

「福音を知る機会を与えてくださった天のお父様に感謝しています。聖典を読んで祈るなら、みたまを近くに感じられることを知っています」と、オリンダ・メネンデス (24歳) は語ります。

「私は、モルモン経が真実であることを知っています。それは主のみ手にある道具です」と、ジューディス・モンソン (20歳) は言います。

「両親や兄と神殿で結び固めを受けた時、私は幸せでした」と、ファニータ・レイオン (12歳) は語ります。彼





女の話によれば、父親は飲食店を経営しており、よく酒を飲んでいたので。「ある日、ひとりの男の子がやって来て、私の父に教会のことを話したんです。私たちは家族全員で宣教師のレッスンを受けるようになり、2週間後にバプテスマを受けました。バプテスマから1カ月後、父はサンベニート支部の支部長に召されました。それから1年後に、私たちは神殿で結び固めを受けました。父はもうお酒を飲んでいません。」

ファニータは、また祈りに感謝しています。「私は病気の時に、何度も何度もお祈りをしました。すると、主は私を癒し、元気になってくださいました。私は、主が真実の神であると知っています。そして、いつも主に忠実でいられるようにお祈りしています。」

現代の聖徒たちの声

末日聖徒の若人が歌い、祈り、証を述べる時、ティカルという古代の地のこの静かな一角に主のみたまが満ちます。ここには神殿のような雰囲気が

あります。

さて、弁当を食べて、ジャングルでかくれんぼをする時間です。道沿いのある地点で、彼らの上に木の葉が舞い落ち、手をたたき音と口を鳴らす音が頭上から聞こえてきます。見上げると、高い木の枝に尾でぶら下がっている猿の群れがいます。少女たちは笑いながらその合唱に加わり、手をたたき、猿たちに口を鳴らす音を送り返します。すると、1匹の猿が地面に何かを投げ落とします。だれかがそれを拾い上げると、それは熱帯の果物の種で、猿の小さな歯形がついています。

一行は帰り支度を整えると、再び静かで穏やかな気持ちになりました。だれの心にも繰り返す浮かぶ次のようなさまざまな疑問をティカルの地に残して。「昔、だれがここに住んでいて、礼拝をしていたのだろう。」「神や宇宙、人生の意義について、何を知っていたのだろう。」「当時の民の父親や母親、夫や妻、麗しい息子や娘たちに、一体何が起こったのだろう。」「ティカルの壮麗な神殿は、今は人の気配もなく、そこにはある種の悲しさ、かつての偉

古代マヤ族の神殿の頂に上った後、若い女性たちは人里離れた石畳の中庭で休息を取り、心に残ったことや感じていることを分かち合った。セミナー教師のルービー・モンソン姉妹（左下）は、一行とともに賛美歌を歌い、証会を開いた。

大な民が不幸な運命に見舞われたという雰囲気が漂っています。

しかし、この若い女性たちの心には、悲しみよりもむしろ、信仰と希望があります。グアテマラシティー神殿をはじめ世界じゅうの末日聖徒の神殿には、現代の聖徒たちの声が満ちていることを、彼女たちは知っているからです。光と真理と答えの与えられる場所であるこれらの現代の神殿は、主のみたまでいつも活気づいているのです。その壁の内側では、末日の父親、母親、息子、娘たちが、生ける神を喜びをもって礼拝し、人生の意義を学び、永遠のために家族としてともに結び固めを受けているのです。□

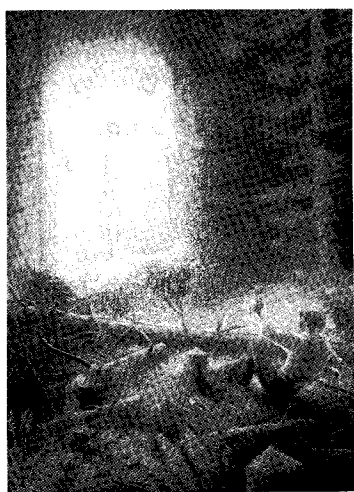


Von Schelt
©92

心の錨いかり

十二使徒定員会会員

M・ラッセル・バラード



皆さんは、大きな船いかりの錨が引き上げられるところを見たことがあるでしょうか。錨の上げ下ろしに伴い、巨大な鎖の輪が、鉄製の船首に当たってギーギーと音を立てる光景を見聞きするのは、実におもしろいものです。もし錨が、海の底に正しく置かれているなら、たとえ荒れ狂う波の上であらうと、巨大な船をしっかりとつなぎ止めてくれます。

どの船にも、外洋上を漂流しないで済むように錨が必要です。同様に、私たちが毎日の生活の中でいつもしっかりと動かず、誘惑と罪という海に

押し流されないためには、霊的な意味での錨が必要です。神と御子、主イエス・キリストに対する信仰こそ、私たちの生活における最も大切な錨です。社会的な混乱や邪悪が蔓延まんえんしていると思われる今日の世界で、この錨は私たちをしっかりとつなぎ止めてくれるのです。私たちの信仰は、イエス・キリストとその生涯あがな、そして末日の世における主の福音の回復に基を置くとき、初めて意義を持ち、効果を現わします。またそのような信仰が、私たちの生活を確固としたものにしてくれるのです。

最近、私は宣教師志願者たちと話をする機会がありました。そのような兄弟姉妹の多くは、すでに専任宣教師になる決心をしていましたが、中にはまだ召しを受け入れるべきかどうかで迷っている人たちもいました。私は、伝道に出るべきかどうかをその一晚で決める必要はありません、と彼らに告げました。ただし、ジョセフ・スミスが、「千八百二十年の早春、一点の雲もない美しい朝」（ジョセフ・スミス2：14）に、父なる神と御子イエス・キリストのみにひざまずいたのがほんとうだったのかどうかという質問に、答えを出す必要はあります、と告げました。ジョセフ自身の言葉に耳を傾け

てみましょう。

「私は、前まえもつ以て行こうと計画をして置いた場所へ人目を避けて入り込んでから、あたりを見廻みまわして人気のないのを見ますとひざまずいて自分の心の願いを神に祈り始めたが、私が祈り始めるや否や、直ちに私は何とも知れぬ力によって促うながえられ、ついに私は全く抵抗力を失った。またその力は私の舌さえしびれる程の驚くべき力を振ふるったので私は物言うこともできなかった。そしてあたりはだんだん暗くなり、一時はあたかも私はこのまま急に死んでしまうかのように思われた。

しかし、私は自分を促えたこの敵の力から何とぞ逃れしめたまえと、全力を振りしぼって神を呼び求めたが、私が今にも絶望に打ち沈んでわが身を破滅に任せようとしたその瞬間、それは考えただけの滅亡というようなものではなく、目に見えぬ世界から来た何ともわからぬ生き者で、全くこれまで私がどんな者に逢っても覚えたことのない程の驚くべき強い力を具えた者の力に打ち負けて、わが身を見捨てようとしたその瞬間、この非常な驚きの瞬間である、私は自分の真上に太陽にも増して輝く一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて、光はついに私の上にふり注いだ。

その光の柱が現われるや否や、私はわが身を縛った敵から救い出された事に気が付いた。そしてその光が私の上に留った時、私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたものを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい、他のお一人を指して『こはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。(ジョセフ・スミス 2:15-17)

もし、ジョセフがほんとうにこのような経験をしたのならば、伝道に出るべきかどうか、主の戒めを忠実に守るべきかどうか、といった宣教師志願者の兄弟姉妹の問題はおのずと解決されるのではないのでしょうか。だれであれ、ジョセフ・スミスの述べているように、天父と御子イエス・キリストがジョセフに姿を現わされ、語りかけられたということを知ったならば、つまり心からの確信をもって知ったならば、どうでしょう。そのような知識は当然の結果として、神と御子に全生涯を通じて仕えたいという強い望みをもたらすでしょう。

人生でいちばん大切に何よりも心を開けるべきなのは、永遠の父なる神とその御子イエス・キリストが、再び天から人類に語られ、予言者と使徒を召され、この地上で永遠の福音をもう一度完全なままに聞けるようにしてください、という知識を得ることです。これほどすばらしい知識はありません。ひとたびこの知識を得たなら、その人の生活には大きな変化がもたらされるのです。

バプテスマのヨハネを通してアロン神権が、また、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを通してメルキゼデク神権が回復されたことについても、これと同様に考えてみてください。皆さん、ごく単純に考えてみましょう。つまり、神の神権がはたして回復されたのか、それとも、回復されなかったのかということです。もし、回復されたことを知ったならば、霊的な意味での錨をしっかりと下ろして、人生の混乱やあらしに対抗することができるでしょう。

同じことが、モルモン経は神のみ言葉であり、イエス・キリストについてのもうひとつの証であるか、そうでないかについても言えます。これは、単純なことであると同時に非常に奥の深い問題です。もしモルモン経が、私も証するように、事実神のみ言葉であるならば、そこに書かれている原則や教えを私たち自身の生活に応用すべきかどうかは、おのずと決まってくるのではないのでしょうか。

今日の生ける予言者や使徒についても、同じように簡単な質問を当てはめることができます。ハワード・W・ハンター大管長は、あらゆる点、あらゆる方向から見て神の予言者でしょうか、それとも、その反対でしょうか。

皆さんは、これらのことがはたして真実かどうかを、自分自身で見いだす方法を知っているはずですが、なぜなら、皆さんは、福音の第一原則を理解しているからです。主イエス・キリストに対する信仰という錨を持っている皆さんなら、みずからの個人的な証を受けるためには祈らなければならないこと

を知っているはずですが、また、聖霊が、「あなたがたにすべてのことを教え、…ことごとく思い起させる」(ヨハネ 14:26) ことも理解しているでしょう。

今仮に、美しい帆船を最良の材料で造り、どれほど荒れ狂う海でもびくともしないように補強、強化したとしましょう。錨も最高の技術を用いた手の込んだものと仮定しましょう。そのような帆船でも、もし、何らかの避けられない理由によって、錨をつないでいる鎖の質が悪く、丈夫でなかったとしたらどうでしょう。錨を下ろしたとき、あるいは、強風が吹いて停泊中の船を荒海の中へ押し流そうとしたときにどうなるか想像してみてください。もし錨を支えている鎖の輪がひとつでも外れたとしたら、その鎖全体が海の底に放り出されてさびついてしまい、船は漂流し、最後には沈んでしまうことでしょう。

私たちの人生もこれとよく似ています。私たちの霊の安全を守るための心の錨にも、信仰と証という鎖がつながっています。この鎖を構成する輪に当たるのが、福音のわかりやすい原則と教えです。たとえば、個人の祈りという福音の鎖の輪がどれほど大切かわかるのでしょうか。皆さんが天父から受けている数々の祝福に感謝の祈りを捧げることは、確固とした信仰を保つうえで役立ちます。さらに、身の回りのこと、学業、仕事、そして人間関係などの面で必要な助けを祈り求めましょう。

あなたの鎖を構成するもうひとつの福音の輪が、知恵の言葉だということに気づいているのでしょうか。忠実に主



の健康の律法に従うときに、この鎖の輪のおかげで丈夫な体を維持し、「智慧と知識の大なる宝まことに秘れたる宝を見出し」（教義と聖約89：19）、もっと精力的に教会に奉仕できるようになります。

もうひとつの輪は、什分の一の律法です。完全に什分の一を支払うということは、お金の問題ではありません。信仰の問題なのです。什分の一の律法に完全に従おうという信仰をはぐくむなら、収入の多い少ないに関係なく、皆さんは完全な什分の一を納めることができるでしょう。主は、この戒めに従順な人々に約束されたように、確かに「天の窓を開いて」くださいます。

全部挙げることはできませんが、正直や道徳的な清さ、人々への奉仕、教会の集会への出席、聖典の勉強といった輪はどうでしょうか。皆さんの福音の錨をつなぎ止めるこのような鎖の輪は、一見初歩的に映るかもしれませんが、信仰や証の錨と同じくらい大切です。どうぞ忘れないでください。鎖は、その鎖を構成するいちばん弱い輪以上には強くならないのです。私たちは、心を福音につなぎ止めてくれる自分自身の鎖の状態を、毎日注意して念入りに点検しなければなりません。鎖の輪の中で、悪魔の攻撃目標になりやすい弱い輪がないかどうか調べるのです。

鎖の輪を全部強いままで維持するためのよい方法のひとつ、それは聖餐を毎週受けることです。ご存じのように、聖餐は、主と交わした誓約を新たにし、思い起こすためのものです。過去1週間の生活を個人的に吟味するのに、これほどよい機会があるでしょうか。どうぞ聖餐の時を活用し、自分自身の福音の鎖を点検する機会、また鎖の輪の一つ一つが自分を教会につなぎ止めるにじゅうぶんな強さを持っているかどうかを確かめる機会としてください。

皆さんの心を福音につなぎ止める鎖は、皆さんの望みに比例した強さを持ちます。悔い改めの原則に感謝しましょう。この原則は私たちの鎖の輪の中に弱いものがあれば、その輪を強くする手段となるからです。もし自分が主イエス・キリストにつながっているのを知っていながら、なおかつ、この世の試練を自分の手には負えそうにないと感じているとしたら、その日1日、主に栄光を帰するために自分にできるかぎりのことをすべて行なってみてください。そして、最善を尽くしたというその確信の中に平安と力を見いだしてください。証の強化は、一生をかけて成し遂げる事柄であるということを心に留めてください。力を得るために、

信仰の鎖を構成する輪の数々、つまり、福音のわかりやすい教えの一つ一つが、私たちの心の錨を支え、私たちの安全を守ってくれる。

主を信頼してください。一度にすべての輪に取り組もうとしないで、ひとつずつ強くして行ってください。そして、自分はイエス・キリストの福音という錨に揺るぎなくしっかりとつながれている、と感じられるようになるまで続けて行ってください。□

私の先祖を 見つけました

ヤラ・カッサブ・テロローソ

私は、1993年3月ステーキ部大会に出席していました。あの朝、私は自分と先祖の生活が、これほどまでに大きな影響を受けるとは考えてもいませんでした。

ブラジル・サントステーキ部の会員たちとともに出席していた私は、大会のすばらしい雰囲気に浸っていました。そして、大会も終わりに近づいたころ、ひとりの姉妹の話に私の心はとても揺さぶられました。彼女の話のテーマは、家族の歴史についてでした。

友人のシルマーラ・ペレスも、この時みたまに強く心を揺り動かされたひとりでした。大会が終わった後、私たちはステーキ部で家族歴史を担当している人の所へ行き、家族歴史抄出プログラムの手伝いをさせてほしいと申し出ました。

次の火曜日、私たちふたりはステーキ部センターへ行き、早速新しい責任に取りかかりました。訓練を受けた後で、マイクロフィルムの記録から氏名と住所を抄出する作業が始まりました。それらの記録から抄出された人々のために、福音の救いの儀式が神殿で執り行なわれるのです。

部屋には、マイクロフィルムを使って抄出作業を行っている人がすでにいました。ありがたいことに、その人は私たちがすぐに作業を始められるよう、自分で作業を進めていたマイクロフィルムを譲ってくれました。

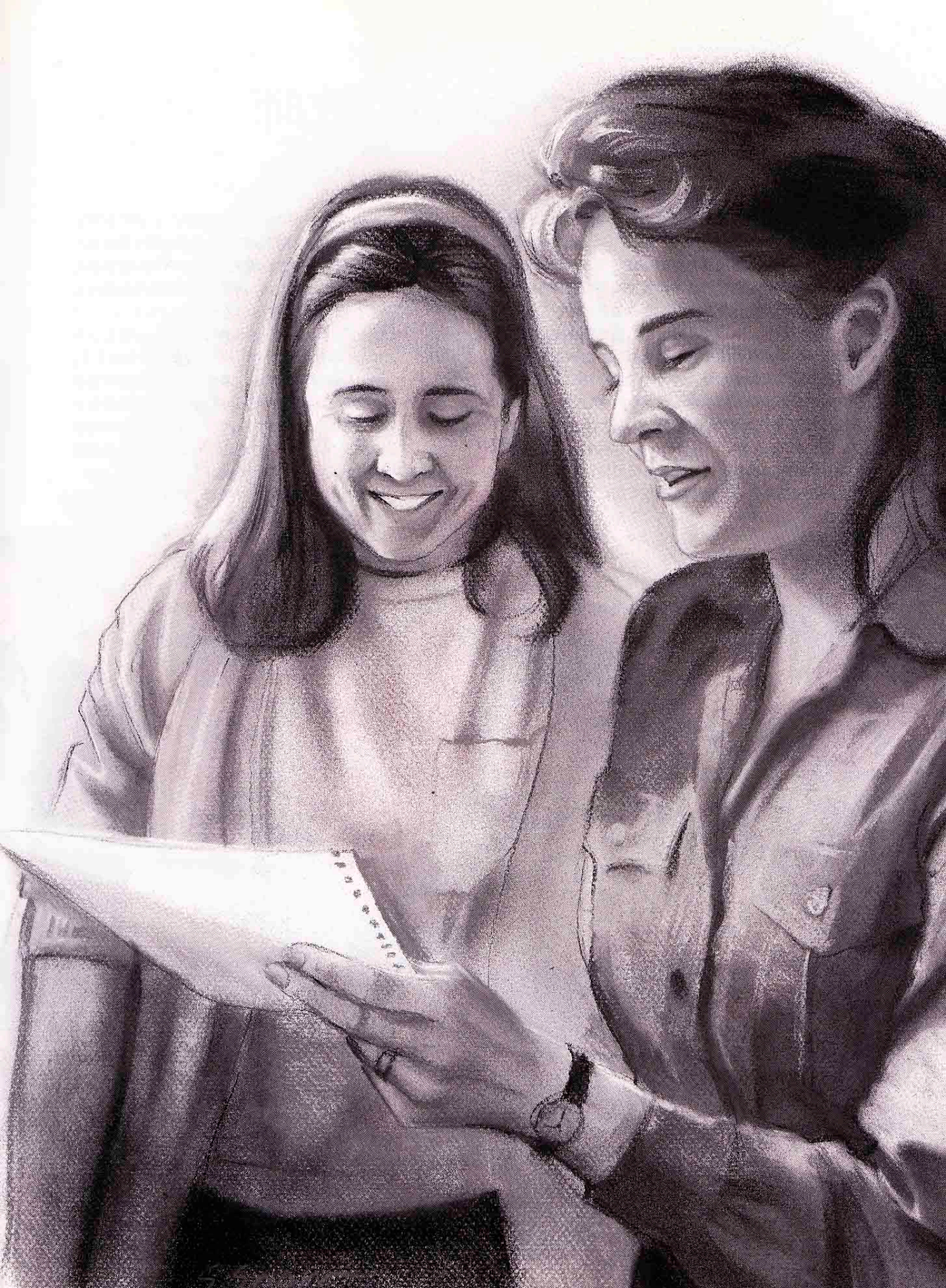
抄出を開始して、ふたり目の名前を見た時のことです。なんとそこには、私の曾祖父そうそふぼ父母の名前があるではありませんか。最初、私は自分の目を疑いました。単なる偶然

の一致でしょうか。私たちはスーパーバイザーに、このマイクロフィルムに収められた記録はどこから取り寄せたものか尋ねました。私たちが興奮しているのを察した彼女がフィルムを最初まで巻き戻してみると、そこには撮影地の町の名前が記載されていました。その町の名はイチラピナでした。

シルマーラと私は、驚いて顔を見合わせました。つい先日、私たちふたりは休暇を利用して、監督の家族と一緒にそのイチラピナを訪ねたばかりだったからです。その町は私の父の故郷だったため、私は以前から訪ねてみたいと思っていたのです。マイクロフィルム上にその名前と日付を目にした私たちは、確かに私の先祖を見つけたことを知ったのでした。その時の感動と感謝、そして満ちてくる証あかしに、私は圧倒されそうでした。こうして私の先祖のために神殿のみ業が行なわれるようになりました。

以来、シルマーラと私はこの奉仕活動を生活の一部にして続けています。私たちの証も強められました。私たちは毎週ステーキ部センターに出かけ、この奉仕を続けています。マイクロフィルムから名前を抄出するたびに、今自分たちは主のために働いているのだということを実感します。こうして名前を抄出された人々も同じようにバプテスマを受け、神殿の儀式にあずかれるようになるからです。

私たちは、この活動が単なる奉仕ではなく、むしろ祝福なのだということを、今ひしひしと感じています。□



うってつけの教師

ウェンディー・エバンス・ユーディー

日 曜学校のクラスが終わろうとしています。14歳のジェイソンが閉会の祈りをしました。今までのレッスンの中でも格別うまくいったレッスンだったので、私は少し長く目を閉じたまま、個人的に感謝の言葉を付け加えました。生徒たちはひょろっとした体を起こして立ち上がり、ゆっくり教室から出て行きました。

ジェイソンが私の前を通り過ぎる時、立ち止まってこう言ってくれました。「ユーディー姉妹、いい話し合いです。いろいろ考えさせられました。」

私はほほえんで答えました。「ありがとう、ジェイソン。私も楽しかったわ。また来週ね。」

レッスン用の手引きと聖典を手提げ袋にしまうと、私は込み合った廊下に出て玄関に向かいました。

「ユーディー姉妹！ ユーディー姉妹！」がやがやという話し声の中から呼ぶ声が聞こえます。振り返ると、日曜学校会長のリチャードソン兄弟が人込みをかき分けながら懸命に手を振っています。

「ユーディー姉妹、ずっとお話ししたかったんですが、なかなか機会がなくて」と言いながら、兄弟は空いた教室に私を招き入れました。「日曜学校のクラスでは、いつもすばらしい働きをしてくださってほんとうに感謝しています。」

「ありがとうございます」と私はほほえみました。



「そこで、私たちは姉妹にはもうひとり生徒をお願いできるだろうと感じているんです」と兄弟は話を続けました。「最近ハウスマン家族がワード部に転入して来たことはご存じですね。今まで娘さんのディードラをどのクラスに入れるべきか思案していたんですが、姉妹のクラスだったらぴったりだと思うんです。」

「ディードラですって」と私は口ごもりました。「でも、あの子は少なくとも18歳にはなっているでしょう。大人のクラスに出るべきじゃありませんか。」それがだめだったら初等協会でも、と思いました。正直言って、私のクラスでさえなければどこでも、といった気持ちでした。

ディードラのことは知っていました。知恵遅れで、聖

餐さんの時に大声で話したり、賛美歌を歌う時にはありったけの大声を張り上げて歌うことを。彼女をからかう女の子が何人かいることも知っていました。男の子たちは彼女をまったく無視していました。この18歳の女の子が、活発な14、15歳の男の子たちばかりの私のクラスにどうしてぴったりだと言えるでしょうか。

「今年私のクラスにはほかに女の子がいないことはご存じですよ」と私はリチャードソン兄弟に念を押しました。「男の子たちは騒々しくすることもありますし、ディードラにはほかにもっと居心地のよいクラスがあるんじゃないませんか。」

リチャードソン兄弟は元気づけるようにほほえむと、やさしく言いました。「いえいえ、私たちはディードラにはあなたがうってつけの教師だと思っているんです。」そして、期待を込めたまなざしで私を見詰めながらこう付け加えました。「もちろん最終的に決めるのは姉妹ですが……。」

私はため息をつきました。そして、「もちろん喜んでディードラをクラスに歓迎します」と答えました。

リチャードソン兄弟の顔に笑みがこぼれました。そして「ご両親には私から伝えておきま



す」とうれしそうに言いました。「じゃあ、来週からお願いしますね。」

ディードラが間違いなくクラスに来るのはわかっていました。ディードラは決して教会を休まなかったからです。もう準備してある次のレッスンのことを考えただけで私の心は沈みました。ディードラの理解力も加味しながら教えた場合、どうやって男の子たちの興味をつなぎ止めればよいのでしょうか。クラスの生徒たちは聖典に関するさまざまな質問に答えたり、話し合ったりすることに慣れていました。それに引き替え、ディードラは字も読めないのです。

「クラスが気に入らないかもしれないわ。そうしたら会長会も誤りに気づくでしょう。」私はそう思うことで自分を慰めました。

翌週の日曜の朝は美しく明けましたが、よい天気も私の心の憂いを晴らすことはできませんでした。祈りの言葉も機械的でした。心がそこになかったからです。

日曜学校の開会行事が終わって、私は教室に急ぎました。そばかすのある鼻に眼鏡を傾きかげんに掛けたディードラは、もうそこに来ていました。

私を見つけると、彼女は顔をほころばせました。そして「こんにちは」と言いながら、いすから跳び上がり私を抱き締めました。「何か手伝えることある？」

私は作り笑いをして、「もしよかったらいすを並べてくれる？ 大きな円にしてほしいの」と答えました。

ディードラが忙しそうにいすを並べていると、男の子たちが教室に入って来ました。そしてまるで警戒するようにディードラを見詰めました。「ほら」とディードラはジムを指差して言いました。「あんたはここに座って。」ディードラがいすを置き、ジムはそこに腰掛けました。一人一人、ディードラは男の子全員に席を割り当てました。最後に自分は男の子たちと向かい合う形で座りました。そして私にほほえみかけ、「うまくできたわ」と言いました。

「そうね、……ありがとう」と私は答え、いつになく静かな男の子たちにディードラを紹介してレッスンを始めました。

男の子たちが私の質問に答えている間、ディードラは何も話しませんでした。神会のお三方の役割についての話し合いは活発に進んでいきました。

私はとうとうディードラに質問しました。「イエス様はどんなことをなさるの。」

彼女は私を見上げ、「私を愛してくださるわ」と答えました。

私は驚いて一瞬言葉を失いました。「そうね、そのとおりです」と私は言いました。私はレッスンのスピードを落とし、もっとディードラに質問を投げかけました。彼女はどの質問にも素朴に、しかし間違いなく正確に答えました。大切な事柄に関してよく理解していたのです。私は男の子たちには、ディードラの答えは私たちが予期したものでなかったとしても、確かに正しい答えであると強調しました。クラスの時間はあっという間に過ぎました。ディードラは教室を出て行く前にもう一度私を抱き締めました。今度は私も抱き締め返しました。

それから後の日曜日が楽だったとは言えません。ディードラが退屈してしまったこともあれば、男の子たちが落ち着かなくなってしまうこともありました。しかし、お互い少しずつ慣れていきました。仲良くふざけ合ったりするようにもなりました。ディードラも負けてはいませんでした。

そんなある日曜日のこと、ディードラが「ジムの隣に座りたい」と言いだしました。男の子たちにひやかされてジムは耳まで真っ赤になりながらも、人のよさを発揮してディードラの隣に座りました。それからというもの、ディードラは男の子たちと向かい合わせではなく、彼らと一緒に座るようになりました。そして、毎週ディードラに指名された男の子が彼女に聖典を見せてあげ、ゲームの時には一緒にチームを組むようになったのです。だれも文句を言いませんでした。ディードラはほかの生徒たちと同じようにすっかり溶け込んでいたのです。

1月がもうそこまで来ていました。私のクラスの生徒はほとんど次のクラスに進級することになっていました。ある日、私はリチャードソン兄弟を探しました。

「もう1年彼女をお預かりしましょうか」と私は尋ねました。

兄弟はやさしくほほえみしました。「ディードラにはほんとうによくしてくださいました。でも、ディードラのご両親と本人を交えて相談したんですが、彼女は進級する準備ができていると思うのです。」

私は、心底がっかりしてしまいました。その時まで、いつも抱き締めてくれる朗らかなディードラを自分がどれほど愛するようになっていたか気づかなかったのです。

「寂しくなりますわ」と私は心から言いました。

「彼女にはあなたがうってつけの教師だって言ったでしょう」とリチャードソン兄弟は言いました。

「いいえ」と私は静かに答えました。「今年だれよりも学んだのはこの私です。ディードラこそ、うってつけの教師だったんです。」□

新たな十二使徒定員会会員召される

ジェフリー・R・ホランド長老



6月23日、大管長会はジェフリー・R・ホランド長老を十二使徒定員会会員として召したことを発表した。

この新しい使徒は、ソルトレーク神殿で毎週開かれる大管長会と十二使徒定員会の集会で聖任された。

ホランド長老（53歳）は、1989年4月1日から七十人第一定員会会員として働いてきた。十二使徒の召しを受けた時は、北アメリカ西地域会長会の一員として、また教会コーリレーション部エグゼクティブ・ディレクター補佐として働いていた。ホランド長老はこれまで、ヨーロッパ北地域会長会と北アメリカ南東地域会長会、さらに中央若い男性会長会で働いてきた。

ホランド長老は教会幹部に召される前、監督、3人のステーク部長の副ステーク部長、地区代表を歴任している。長老はまた、メルキゼデク神権MIAプログラムのディレクター、教会ヤン

グアダルト委員会委員長の責任も果たした。青年時代には1960年から1962年まで、イギリスで専任宣教師として働いている。

1980年から、1989年に教会幹部に召されるまで、ホランド長老はユタ州プロボのブリガム・ヤング大学第9代学長を務めた。さらに、教会教育部理事長やブリガム・ヤング大学宗教学部学部長の任を果たし、いくつかのインスティテュートで講師も務めた。

ブリガム・ヤング大学では英語の学士号と、宗教教育学の修士号を取得している。エール大学ではアメリカ史研究の分野で哲学の修士号と博士号を取得した。長老には「道は長く険しくとも」と「地上に天国を築く」という2冊の著作があり、後者はパトリシア夫人との共著である。

ホランド長老は教会幹部の召しを受けるまで、いくつもの教育専門家の団体に活躍していた。キリスト教徒とユ

ダヤ教徒との相互理解を促進した長老の働きをたたえて、全米的なユダヤ教組織からは「自由のたいまつ」賞を授与されたこともある。また、いくつかの市民組織や企業関連団体の理事会で指導的立場にあった。

ホランド姉妹は、4度にわたる扶助協会会長の責任や、中央若い女性会長会での2年に及ぶ召しをはじめ、教会でさまざまな召しを果たしてきた。

ホランド夫妻は1963年に結婚し、2男1女と孫がひとりいる。

1993年10月の総大会でホランド長老は次のように証した。「失意と悲しみの存在する世、罪のはびこる世界にあって、恐怖や絶望が押し寄せてくるようなとき、また人間性がゆがめられながらも、それを癒すものが見つからないとき、私〔は〕こう申しあげます。『イエスを信頼しなさい』と。」「神の命に従って生きよ」「聖徒の道」1994年1月号、p.17) □

東京神殿の新神殿長に 菊地良彦長老が召される



菊地良彦神殿長ご夫妻

このたび、七十人第一委員会さくの菊地良彦長老（52歳）が東京神殿の神殿長に召された。菊地（旧姓一越谷）登志子姉妹は神殿長夫人として介

添え役を果たす。

北海道幌泉ほろいずみ出身の菊地長老は、東京都にある亜細亜大学を卒業した。専攻は経営心理学である。1977年10月に七

十人第一委員会に召された時は、販売関係の管理職にあった。

全時間を教会の召しに捧げるようになる以前に、菊地長老は、宣教師、支部長、ステーク部長の責任を果たし、ふたりの伝道部長の下で副伝道部長として働いた。

教会幹部に召された後、ハワイで伝道部長を務め、北アメリカ北西地域会長会、ユタ北地域会長会の一員としても働いた。最近では、北アメリカ北東地域会長会第一副会長および教会伝道管理部エグゼクティブ・ディレクター補佐を務めていた。

菊地姉妹も北海道の出身で、初等協会教師、ステーク宣教師、扶助協会会長および教師などの責任を果たしている。

菊地長老が末日聖徒の宣教師と最初に会ったのは、病氣療養のため室蘭のおじの家に身を寄せていた時期だった。

1カ月後に改宗した彼は、同じころ、2年間の求道者生活を経て教会に入った越谷登志子姉妹と出会う。菊地長老が専任宣教師の務めを終えて帰還した2週間後、ふたりは結婚した。

菊地夫妻には、娘が3人と息子がひとりいる。□

旧約聖書の教えをさらによく理解し、 日々の生活に役立てるには

旧約聖書の中で繰り返し取り上げられている話題のひとつは、神と人の間に交わされる聖約についてです。さまざまな聖約の一つ一つについて、それを従順に守ることによって大いなる祝福を受けた人々や、反対に聖約を守れずに敗者となった人々の物語が繰り広げられています。これらの物語を知り理解することによって、偉大な模範を学び、誘惑を受けたときにそれを遠ざける力を得ることができます。次のような事柄をお勧めしたいと思います。

●青少年に旧約聖書の物語を教える。
これらの物語を現代の生活に当てはめ

て話すことにより、青少年も旧約聖書から力と導きを得られます。私はヨブの生涯から、人は悪いことをしていなくとも困難に直面することがあり、逆に、地上ではときとして悪人が栄えるままにしておかれることも学びました。

●福音の教義クラスに出席する際、あらかじめ読書課題を読んでおき、レッスンに積極的に参加できるように準備する。今年の読書課程は旧約聖書です。準備することにより前もってある程度の把握ができるだけでなく、みたまによって証を受けてさらに深い理解が得られるでしょう。

●旧約聖書を読み、深く考え、祈る。

このステップを踏むことにより、証が強められます。デビッド・O・マッケイ大管長は、その著書「人は自分自身で知ることができる」(p.23)の中でこう書いています。「瞑想は、私たちを主のみもとへと導くきわめて神聖な秘密の扉である。」私も主のみもとに頻繁に行きたいと思います。

フロリダ州レークランド
ミキ・アマーソン

同じ問題、同じチャレンジ

私たち夫婦はふたりとも今まで旧約聖書をあまり読んでいたことがありませんでした。しかし、最近ふたりで勉強し

てみてわかったことは、イスラエルの人々が直面していた問題やチャレンジの多くは、現在の私たちのそれと同じだということです。また、現代の予言者が古代の予言者たちと同じ事柄について警告を与えていることもわかりました。

聖典を学ぶことが一番の目的ではありませんが、むずかしい表現やあやふやな部分についてはインスティテュートのテキストの助けを借りました。また、国会図書館で催されていた死海写本の展示会を訪れ、トラー写本をはじめ、多くの写本の断片やその翻訳などを見てきました。

バージニア州アーリントン

R・ニール・シュローダー、スーザン・シュローダー

わかりやすく貴い教え

旧約聖書に登場する人々について学ぶとき、「この人物の取った行動からどのような特質や人格が読み取れるだろうか」と自問してみることができず。

この問いに対する答えを見つける中で、よい面と悪い面双方の教訓を学ぶことができ、普通なら単なる史実としてとらえてしまいがちなことから永遠の真理を見いだせます。たとえば、ダビデの勇士たちの物語からは、軍事的な細かい事柄ではなく、忠誠と無私の精神を学べます。サウルはただの落ちぶれた王ではなく、高慢によってだれでも破滅に導かれ得ることを示す事例となってきます。また、回復された聖典に記されたわかりやすく貴い教えを基にして旧約聖書を学ぶなら、わかりにくい事細かな記述としか思えなかった事柄の裏側に偉大な真理が隠されていることに気づくでしょう。

ユタ州プロボ

ビル・ダンカン

参照聖句

父祖アダムやノア、そしてアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフは皆私たちの先祖です。彼らの生涯や主との交わりは、人類の歴史が始まってからの最初の2311年に及び、それらは78ページある創世記（英文）に取められてい

ます。私は参照聖句や脚注に線を引いています。それから文章の中から対応する箇所を印を付けます。そしてその節に関連する参照聖句も読みます。この方法はとても助けになります。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はその著書「救いの教義」の中で次のように勧告しています。「筆記されたものであると、口述されたものであるとを問わず、私たちは主の啓示と矛盾するものを受け入れることはできない。……私たちはいろいろな人々の教えを測る物差し……として四大聖典を受け入れている。」（「救いの教義」第3巻、pp.181-182）

ユタ州ファーミントン

リンダ・Y・ニューカマー

現代への教訓

50年近くも前になりますが、セミナーのエフィー・チャドウィック先生のおかげで私は旧約聖書が大好きになりました。その気持ちは今に至るまで少しも変わりませんでした。旧約聖書に書かれた事柄を理解し、自分の生活に応用するためには次のような事柄を求め、見いだす努力が大切です。

- 旧約聖書に記された、現代に当てはまる福音の教え。私たちがそれを理解して見つけようとするなら、それらが豊富にあることがわかります。
- キリストに関する予言や啓示。
- 罪悪に満ちた現代の生活への指針となる事柄。
- 聖典の研究と理解を導くみたま
- これらの教えを毎日の生活に応用する方法。

ワシントン州ポートエンジェルス

ポール・M・スミス

家族で学ぶ

改宗者の私は、これまでプロテスタントの信仰の中で育ったことから、好きな聖典の物語は聖書、それも特に旧約聖書の中の物語です。この偉大な書物から学ぶようにと天父が望んでおられる事柄をすべて理解するのは、私にとってとてもむずかしいことでした。子供たちにとってはそれ以上にむずかしいことだろうと思います。幼い子供たちが旧約聖書を理解できるようにと、

家庭の夕べで簡単なゲームを取り入れたりしましたが、それはとても役立ちました。

少しむずかしい、しかし有益なゲームも取り入れてみました。まず、ある物語を選んで子供たち一人一人に内緒で割り当てます。そして紙とクレヨンで配ってその物語の絵を描かせるのです。絵が仕上がったら家族全員でその絵の示す物語を当て合い、それからその物語の意味について話し合います。子供たちには彼らのよく知っている物語がいつも割り当てられました。このように家族で旧約聖書やほかの聖典を学ぶことを通して、中に記されている物語に親しむようになりました。

ペンシルベニア州シュルーズベリ

リン・セクリスト

模範に従って

私のこれまでの生涯の中で、旧約聖書は慰めと導きの源となってきましたが、私にとって最も理解しづらい聖典であるのも事実です。しかし、新約聖書やモルモン経、また教義と聖約の助けを借りて旧約聖書の教えをもっとよく理解できるようになりました。そして、旧約聖書に登場する人々の模範に従って、福音に根ざした奉仕に自分を捧げられるようにと努力してきました。息子たちをユタ州プロボの宣教師訓練センターに連れて行った時には、息子のサムエルを主に仕えさせるために神殿に連れていったハンナの愛と献身に思いをはせました。私はこの旧約聖書が教会の標準聖典の一部であることに感謝しています。

カリフォルニア州ビクタービル

イレイン・ダンカン

まとめ

1. 学ぶとき、導きを求めて祈る。参照聖句を活用する。
2. 福音の教義クラスに出席する。読書課題を読む。
3. すべての聖典を旧約聖書のより深い学習に役立てる。
4. 聖書の模範や物語から学んだことを日々の生活や家庭に生かす。（「チャーチニューズ」1994年1月1日付）

目と耳が不自由な私を生かして

この記事は、松川音太郎兄弟が書かれた点字の原稿を、奥様の松川敏子姉妹が訳してくださったものです。

仙台ステーキ部長町ワード部
松川音太郎

10歳の時失明しました。母が嘆き悲しくて、夜外に出るといつも、「お月様が見えるか」と聞くので、いつも「見える」と言っておき、安心させるのでした。そのうちに病院へ入院させられたのでした。少しよくなってきましたが、家へ帰りたいので退院させてもらいました。家へ帰ってみんなと一緒に、とてもうれしかったです。失明して、5カ月目に耳が聞こえなくなって、みんな悲しみに静まり返って、自分もこれから真つ暗な音もない世界に行くように感じて、泣きそうに悲しかったのでした。人の声が聞こえなくても、文字を知っていたので、文字を書いてもらってお話をしたのでした。文字を知らない小さな妹たちの言うことがわからないので、幾たびか妹たちが泣いたのでした。

また、入院させられたのですが、よくならないので悪くされ帰りました。別な病院にも入院させられて、そこでは文字を読めなくても人の顔がやっとだいたいわかるようになったので、退院させてもらいました。妹や弟たちに、船でも人形でも水鉄砲でも、たこでもつくってやったり、何かお話を教えたりして遊んでやっても、やはり彼らの言うことがわからないので泣かれるのです。だからどこか歩いている時、わざとこっけいなことをして見せたり、木の葉を口に入れて食べるふりをして見せたりして笑わせたりもするのです。いつか栈橋で遊んでやっていると、栈橋の板が外れて水の中にどんぼり落ちて、着るものもなくして昼間の2時ご

ろなのに布団を敷いて寝ました。いろんなことがありましたが、発音できなくて大変なことになったのです。あまりに心痛めて、だれもいない藪の中や田んぼに行ったり、沢に降りて行ったり、だれもいない所で、出ない声を無理無理に出して苦しかったのです。よくならないのであきらめようとしてもあきらめないで幾日が続いたら、少し楽になったので、たびたびだれもいない所に行って練習したのでした。釣りはとても好きで、ひとりでも釣りに行くのです。

世の中が困ってきたので薬も手に入らなくなって、よくすることもできないので困りましたが、いろんな神様を拝んでいました。人に知られないつらい悩みもあるので、神様を拝むのをやめようとしてもやめられなかったのです。ある日の夕方、お風呂の火をたいていると妹が来て、「キリストを知ってる」と聞かれました。「知らない」と言っておきました。幼いころに札幌で「アメン」と唱えていたのを思い出して、「少しは知ってるよ」と言ったら、「その人は、はりつけに

された」と教えてくれました。「その人は、大工か」と聞いたら、「そうではない」との返事でした。「何かを作ったのかい」と聞いたら、「何も作らない」との返事でした。「それでは何か悪いことをしたのかい」と聞くと、「悪いことはしない。」「それでは、間違っただけで殺されたのかい。」「そうではない。」「それではどうして殺されたのか。」「あんまり偉い心を持っていたから、憎らしかって」と教えてくれました。何も悪いことをしなくても、はりつけにされた人もいるのを知った時、弱気を起こしてはならないことを思いついたのでした。この時妹が、「偉い人はみんな静かにして笑っている。偉い人はみんな静かにして死んでいく。死んでから天国に昇って行く」と天を指差して教えてくれました。「あなたも何も考えないで、静かにして笑っていなさい」と教えてくれました。

初めてキリストのことを教えられた時、強く心を打たれました。22歳の10月の初めのころでした。この時から元気な希望が回復して、どこへ行ってもどこにいても、キリスト様のことを



松川音太郎ご夫妻

ださるキリスト様

思っていたのです。ある時藪の中で道に迷って、死に物狂いに探しても帰れない時、キリスト様のことを思って、「どんなにつらくても死ぬのはいやだ。キリスト様のことを知らないで、どんなに年とっても死ぬのはいやだ」と思っていたのです。ある時、強い高い波にかぶられて、海に落とされるところを助かったのです。この時もキリスト様を思って、「キリスト様は見ているだろうか。何をなさっておられるのだろうか」と思っていました。夜も小屋に入って、「今は星がたくさん瞬いているかもしれない。お月様も明るく照らしているかもしれない。キリスト様も見ているかもしれない」と、どこに行ってもそう思うのです。

ある日のこと、泳いで岩に上って少し休んで、また浜辺に帰ろうとして方角を間違えて、沖へ沖へとずっとずっと泳いで行ってしまったのです。いくら行っても行っても、足が届かないので、「変だな」と思っても浜辺に來れないで、心細くなってきました。右や左へ行っても足が届かないので、死に物狂いに探して、だんだん力も元氣もなくなって、胸がたたかれているようになっていました。この時もキリスト様を思って、「キリスト様は見ているのだろうか」「人に知られないつらい悩みを通して来て、幸せも安らぎも持たないで死んでは悔しい。死にたくない。だれか助けに来てくれればいい」と思いながらも死に物狂いで探したり、足が届くか何回か沈んでも、届かないで、だんだん沖へ沖へと行ってしまったのです。弱くなっておぼれてきました。方角がわからなくて、どっちに行ったらいいのかもわかりません。沈みそうで、苦しがつても、「死にたくない、死んでは悔しい」と思いながら、「だれか来るか」と待っていても、もう助からない苦しさでした。いつもは

黙っているけれど、こんな時黙ってはられないので、大きな声を出して待ってもだれも來ないので、また呼んでみました。だれも來ないので、心の安らぎも持たないで、「こんな深い海の底に死んで行くのか」と残念でも、「死にたくない」と待っていることもできない苦しみでした。

その時後ろから肩に手をかけられました。妹でした。方角を教えられても、声を出す力もなくなっていました。そんなになっても、不思議に手足を動かしていました。浜辺に行くと、途中ですっかりだめになって沈んで行くところでした。不思議に手足を動かしてワカメに足が触ったので、足が届きました。水から上がる時、歩く力もなくなって、石に寄りかかり、動かなくなって死んだようになってしばらくそのままになっていました。帰る時だれかの肩につかまって、フラフラ倒れそうなのを無理に立ち上がって、何度か倒れそうになりながら帰ったのです。危ないところを助かったのです。方角を教えに來た人は、キリストのことを教えてくれた妹ではなく別な妹でした。とても感謝し愛らしかかったです。

元氣になってもキリスト様のことを思って、いつかきくと知ようになるかもしれないと思いました。松林を歩いている時も、大きな大木に手をかけて、「この松の木、何十年、何百年、いろんなあらしにも冷たい風にも、暑さにも遭いながら我慢して生きてきたのだ」と元氣づくのです。岩の水たまりにつぶがひとつあって、手のひらにのせて、つぶがひとり寂しく孤独で生きていたのだ、「孤独は自分だけではない」と思って元氣づけられていたのです。遠くで迷っても弱氣が起きないで、夜になっても捜して帰る途中、勇氣を回復するのです。草でも木でも竹でも、楽しみなくて生きているも

のを何でも「かわいそうだ」と思うのです。植物でも動物でも鳥でも、彼らのことを思って、元氣だったのです。

妹が盲学校から点字の虎の巻をもらってきました。点字を教えてくださいました。キリストのことを教えてくれた妹です。点字を覚えてから、盲学校から点字の本も借りてきてくれました。しばらく人の話も聞かないので、世の中の言葉が変わったかと思って心配でしたが、読んでみると変わってはいないのでほっとして、むさぼるように読みました。それを見て妹は、心配して体を悪くしたら大変だから、「やめなさい」とせがむので、隠れて夜遅くまで読みました。読んでいると、キリスト教とか聖書とかの名前を見いだして、それでは「キリスト様の本もあるのだ」とわかって、矢も盾もたまたま欲しくなりました。

28歳の時、点字を教えられました。点字を教えられてから3年たったある5月の美しい日に、畑仕事から帰ってきてみると、九州の鹿児島県の知らないおばあさんからキリスト教の薄い本が送られてきていました。そのおかげで聖書研究講座からも資料が送られてきて、詳しくわかってきました。天の神様が、人間も天地万物も創造なさって、父なる神様でキリスト様が、神様のことを教えて身代わりに死んでくださったのもわかりました。それから、いろんな神様を拜むのをやめて、天の神様を拜むようになりました。聖書も求めることもできました。

読んでみて初めて元氣づいたのは、ハバクク書第2章2節から4節までの聖句でした。聖書を全部は持っていなかったで、あちらこちら読んだのです。イザヤ書第44章22節「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから。」この聖句もかようにありがたく思いました。黙示録を読んで特別元氣づいたのは、第7章14節から15節「わたしは彼に答えた、『わたしの主よ、それはあなたのご存じます。』すると、彼はわたしに言った、『彼らは大きな患難をとおってきた人

たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。」いろいろな艱難に遭いながら終わりまで堪え忍んで勝利するのを知ったからです。ほかにもいろいろな聖句がたくさんあります。バプテスマのことも知って早く受けたくなったのです。

ひとりて教会に行かれないので、東京に手紙を出したのです。するとあちらこちらの教会から手紙が来たり、牧師さんたちが来たりしたのです。しかし、みんなキリストが受けたバプテスマとは違うので、お断わりしてばかりいて、とても気の毒で心が苦しかったです。ある時、目が開けるようなりっぱな聖書をもらった人のことが書いてあったのを読んで、自分もその聖書を欲しくて焦ったのです。

またある時、「屋根に十字架のない教会は、キリストの教会です」と書いてあったのを知って、それでは「屋根に十字架のない教会があるかもしれない」と思って、弟に話して、「見つけたら、その教会の住所を書いてきてほしい」と頼んだのです。彼は、随分難儀して探しても見つけないでもあきらめないで、やっと見つけて書いて持って来ました。頼んでから10日たって来ました。あまりにも「すまなかった」と思いましたが、彼は喜んで笑って手渡してくれました。早速手紙を出しました。お返事が来ましたが、「りっぱな聖書はありませんから、東京に聞いてみます」と書いてありました。15日たってもお返事が来ないので、東京にもないように思い、「あの目が開ける聖書は、新約聖書と旧約聖書から抜き取ってりっぱにまとめたものだ」と思って気にしなくなりました。

ところで、そこの教会の方が、横浜の教会の方に報告なさいました。横浜から「お友達になりたいです」と手紙が来ました。こちらはいつも沈黙で、お話も好きではなかったのでお断わりしました。それから何も来なくなりましたが、バプテスマを受けたくても行かれないので、いろいろな悩みもあって、歯ぎしりしたのです。神様のみこころもあって、心を静かにしている時もあ



おふたりは、手で会話をします

ります。いくらたっても何もならないので、また歯ぎしりが起きるのでした。しかし、信仰は取れないで、その逆境のさなかにも神様に賛美したり感謝したりもしていたのです。詩篇第19篇の聖句は、自然界の様子は神様の愛の表われであることも気づいてそこの聖句を口ずさむのです。「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる。話すことなく、語ることなく、その声も聞えないのに、その響きは全地にあまねく、その言葉は世界のはてにまで及ぶ。」

神様が必ずバプテスマを受けさせてくれる時が来ると信じていました。横浜の方にお断わりしてから1年たちました。その間にも、いろんなつらい悩みも、歯ぎしりもありました。このままではだめなので、横浜の方から力を借りようと考えて手紙を書きました。しかし断わってから手紙を出しても、「返事をよこさない」と思うので破ってしまうのでした。何もしないといつまでもできないので、力を借りたくて手紙を書いても、出すのを迷ってまた破るのでした。また書いても破ってしまうのでした。思い切って出してしまったので、「どうなるか」と気がかりでした。1週間たってからお返事が来たので、読んでみては不機嫌な様子は何もありませんでした。「しめた」

とあってうれしかったのです。少しずつ文通してる間にモルモン信者たちは、神殿で死者のための儀式をすることが教えてありました。この時まで、「モルモン教会は、偽予言者からだまされてできた教会だ」とうわさされていたのですが、モルモン信者が、死者の身代わりの儀式をしているのを知った時、この教会こそは絶対に見逃さないと思いました。だんだんたっていく間に、ほんとうに偽物からだまされたのではないとわかってきました。しかし、なかなかバプテスマを受けに行かれないので憂っていました。

7月の末ごろ、ひまわりがたくさん咲いている花を触りながら歩いていました。その時も教会に行っている人たちをうらやましく、早く受けたいと思っていたのです。不思議にひまわりの花と花の間から、涼しい風のようなものが吹いてきたように感じて、耳元で「心配しないでいなさい。バプテスマは必ず受けられます」と細い、低い声が聞こえました。何も聞こえない私は、「聖霊だろうか」と思いました。悪霊はそんな声を聞かせないはずです。きっと聖霊です。早くバプテスマを受けたいので、「自分で手紙を書いて出したい」と考えたのです。すると突然、恐ろしいものが現われて、背中も足も折られるようでした。その上、あまりに恐ろしい力のある目をしていました。その時、「神様はいない」と思いました。

家族の証

福音との出会い

高崎ステーキ部前橋ワード部 瀬戸寿子

しかし、聖書は、神様が人間に書かせた本であることをわかっているのに、また何か下手なことを言ったりしたら大変だから、熱心に天の神様に心で祈りました。すると、その恐ろしい者がいなくなったのです。しかし元気が弱くなったのでした。また元気になったので、手紙を書いて出しました。次の日の朝に、不思議なまぼろしが現われたので、「何かきつと起きる知らせかもしれない」と思って、油断しないでいました。1週間くらいたって、仙台にバプテスマを受けに来たのでした。

その後1年半くらいたってから、横浜のご夫婦が、うちまで来てくださいました。とても懐しくうれしかったです。だんだんたっていくと、モルモンの教会は、ほかの教会にはないいろんな戒めもあるのがわかってきました。死者の身代わりの儀式をする大切な行ないをしています。マラキ書第4章5節、「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである。」モルモンの教会は、偽ではありません。

ニーファイ第二書第27章6節から7節。「また主なる神はある書物の言葉を示してお前たちに伝えたもうが、これは死んだ人たちがのこした言葉である。その書物は封じてあって、その中には世の始めから世の終わりまでについて神が啓示をなしたもうたことがのっている。」また、モルモン書第8章28節は、ジョセフが、モルモン経を金版から書き写す時に起きる混乱のことも書いてあって、それも成就しています。本物です。弟が探して見つけてくれた教会は、仙台の末日聖徒イエス・キリスト教会だったので。すばらしい教会に導かれました。心に安らぎを持ちました。神様のみこころに任せてあります。もともと神様を好きでなかったら、キリストのことを教えられても信じないで、心弱っていたかもしれません。神様を好きでよかったのでした。神様に厚く感謝いたします。(まつかわ・おとたろう)

神様は、私たち家族をお忘れにならなかったのだ、私たち家族を救ってくださるためにふたりの宣教師を遣わしてくださったのだ、ということが、バプテスマを受け、そして日にちが過ぎていくうちにほんとうに確かなもの変わってきました。

彼ら宣教師に出会う前、私たち夫婦はお互いの心が擦れ違い、家庭が壊れてしまうほどの困難な状況のまっただ中でした。私は何のために生まれてきたんだろう……私の人生って一体何だったんだろう……ほんとうに真っ暗な淵の中をのぞいてしまったようでした。しかしまだ当時11歳と8歳そして3歳の子供たちは必死になって、家族、家庭を守ろうとしていたのです。子供たちに励まされ、そして私は悟ったのです。どんな結果になろうとも、悔いの残らないように心を尽くそう、もしだめになっても精いっぱい尽くしたのなら、思い残すことは何もないじゃないか、と……。そして必死になって努力し生活している時だったのです。

土曜日のちょうどお昼ごろです。「お母さん！ 外国の人だよ」という8歳の息子の声から、モルモン経との出会いが始まったのです。彼ら宣教師の名前はクランフォード長老とマテアキ長老といました。金髪眼鏡の青年と私たちと同じ黒髪のいかにも学生という感じのさわやかなハワイの青年でした。第一印象は、なんてきれいな目をしているんだろう、そして、とても楽しそうで、いきいきとしていたことでした。今思うと彼らそのものが福音だったのだとわかります。

最初、宗教に対して少し臆病であった私に対し、意外にも夫が積極的に受け入れてくれました。宣教師から福音を学ぶようになり、神様のことを知り、イエス・キリストのことを知り、幸せ

になりたいと思いました。主が、私や家族をそしてすべての人たちを深く愛して、贖ってくださったことを知り、本当に泣きたいくらいありがたいと思いました。そしてバプテスマを受けたいと思いました。最初は、夫と私だけがバプテスマを受けるつもりでした。ところが、子供たちから「私たちも一緒にバプテスマを受けたい」と言われました。私が「なぜバプテスマを受けたいの?」と聞くと「家族がいちばん大切だから」と答えが返ってきました。

心を開き、福音を受け入れるようになってから、私の心は穏やかになり、すべてのことに感謝でいっぱいになり、喜びをもって生活できるようになりました。そして夫とも心を開いて話をし、互いに分かち合い、互いに思いやることができるようになりました。そして1993年12月26日、夫と私、そして12歳の娘、8歳の息子も一緒に家族でバプテスマを受けることができました。

今の生活は、ほんとうに幸せでいっぱいです。心を尽くし精神を尽くし愛をもって生活することがどんなにすばらしく、喜びを感じるかよくわかります。寒さの中で咲く小さな野の花にも神様の深い愛を感じます。神様はすべてのものを愛していらっしゃる。

私には3人の子供がいます。この子供たちが大きくなって宣教師として召される時まで、愛情深く、そして責任を持って育てていきたいです。私たちが、宣教師の彼らに出会って福音を感じたように、多くの人々に温かい愛を感じさせる人に子供たちを育てていきたいと思っています。「神に愛されている兄弟たちよ。わたしたちは、あなたがたが神に選ばれていることを知っている。なぜなら、わたしたちの福音があなたがたに伝えられたとき、それは言葉だけによらず、力と聖霊と強い

確信とによったからである。」(Iテサロニケ1:4-5)

天のお父様とイエス・キリストが昨日もきょうもいつまでも同じにましますこと、そしてすべてを愛していらっしゃることを感じ、心から感謝します。

そして心を開き、愛をもって分かち合うことの喜びを私たちに教えてくれたのは、19歳と20歳の青年宣教師です。クランフォード長老、マテアキ長老、ほんとうの愛をありがとう。(せと・ひさこ 扶助協会音楽指揮者)

も驚き、戸惑いました。ちょうど新しい家を建てようとしていたからです。月々の返済のことを考えると、しばらくどうしたらよいのか思い悩んでしまいましたが、妻が、「こんなにすばらしい教会の中で福音という心の豊かさを得られているのに……頑張れば必ずやれるから一緒にやっていきましょうよ」と私に言ってくれました。私は物の豊かさが幸せであるとずっと思い込んでいたようです。ほんとうの幸せは心の豊かさであるということにやっと気がつきました。彼らから福音を学ぶ回数が増えるにつれて、そしてモルモン経を読み進んでいくうちに、逆に自分の一を納めることで、私たちは天のお父様やイエス・キリストに少しずつ近づくことができると確信し、喜びを感じられるようになっていました。

そして、バプテスマを受けた後で「真直ぐで狭い道」(IIニーファイ31:18)についての証を得ました。私はこの「道」とは「隣人を愛する」ことであると思います。それはとても大切なことですが、自分自身の生活の中で毎日実行していくのは非常に大変です。今までの私の罪を悔い改め、神とすべての人々とを愛していこうと心に深く刻んで生きていきたいと思います。

11歳(長女)と8歳(長男)の子供たちふたりは「10年たったら宣教師になっているんならに福音を分けてあげたい」と今から張り切っています。私と妻は子供たちのそんな姿を見ると、とても楽しみで、うれしく感じています。朝晩のお祈りでは3歳の次男も加わり、「ぼくが」「私が」と子供たちの間で進んでお祈りをするようになっており、日々の神様からの多くの祝福に家族全員で感謝しています。

私たち家族は次の目標として、家族で神殿に参入し、結び固めの儀式を受けられるよう、ゆっくりですが一歩一歩手と手を取り合って歩んでいます。私たち家族をずっと祝福して、ここまで導いてくださったふたりのすばらしい宣教師クランフォード長老とマテアキ長老に心から感謝しております。また教会にあっては、私たち家族をいつも支えて祝福してくださった兄弟姉妹に深く感謝いたします。(せと・まもる)

家族でバプテスマを受けて

高崎ステーキ部前橋ワード部 瀬戸衛

私たち家族は1993年12月26日に、たくさん兄弟姉妹の祝福の中で、クランフォード長老とマテアキ長老によってバプテスマを受けることができました。私たち家族がここまでやってこられたのは、ほんとうに彼らふたりの宣教師の温かい祝福によるものであると深く感謝しております。そして彼らを通して私たちに福音をもたらしてくださった天のお父様と、イエス・キリストに対して心から感謝しております。

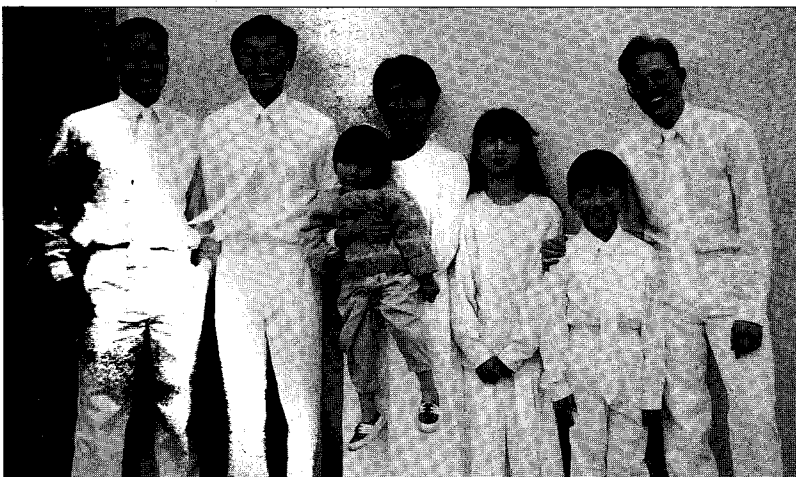
私の両親も妻の両親も教会員ではありません。私たち家族は、宣教師を通してモルモン経に出会うことができました。モルモン経をいただき、読み始めてまだ2カ月くらいですが、ほんとうにすばらしい聖典であると思います。

初めてモルモン経を読んだ時、心に残った聖句を彼らに話しました。それはニーファイ第三書第19章31節から33節です。「イエスはいま一度、ややはなれた所へ行って御父に祈りたもうた。しかし、その祈りの言葉は人の口で言い表せず、また人の筆で書き記せないものであった。しかも群衆は実際これ

を聞きまたその証^{あかし}をした。かれらはその心が開かれて光に照らされたから、イエスの祈りの言葉を心で理解した。」私は、異国の人であって言葉の障害があったとしても、心が開かれているならば必ず、言葉ではなく心で理解することができるかと確信しました。宣教師から福音を学ぼうと、最初のころは互いに辞書を片手に会話をしていたのですが、いつの間にか辞書は使わなくなってしまいました。私たちは聖典を読むにつれて彼らとのコミュニケーションがとてもスムーズになり、互いの心を通じ合えるようになったのです。

宣教師と出会い、そしてモルモン経を知った私たち家族は、毎日がとても楽しく充実したものになってきました。私は彼らと出会うまで、一度も聖書を読んだことはありませんでした。福音の言葉の意味についてなかなか理解することができませんでしたが、バプテスマを受けた後でみたまがさきやいてくださいました。「福音とは彼ら宣教師そのものです」と。

私はバプテスマを受ける前に「^{じゅうぶん}自分の一」について初めて聞いた時、とて



バプテスマ会での瀬戸氏家族

末日聖徒として初めてボーイスカウト富士章を受章

大阪堺ステーク部泉南支部の**大迫恵兄弟**（今年の1月よりプリガム・ヤング大学ハワイ校に留学中）は、ボーイスカウトの最大の栄誉とされる富士章（米国ではイーグル章に該当）を、末日聖徒として初めて受章した。顕彰の式典は、3月30日に東京の首相官邸で行なわれ、今年は150人が栄えある章を受けた。

大迫恵兄弟が富士章を受けるまでの歩み

大阪堺ステーク部アロン神権委員会

1994年3月30日は、大迫恵兄弟と同じように富士章を受賞したスカウトたちにとって、これまでの人生の中で、特別な思い出となる1日であったことでしょう。

昨年富士スカウトとなったシニアスカウトたちとともに、早朝まず首相官邸を訪れました。細川首相はあいにく政局多忙のために、代理の内閣副官房長官よりお祝いの言葉をいただきました。その後、皇太子殿下のお住まいである皇居の東宮仮御所に参殿し、皇太子殿下の接見を受け、お祝いの言葉をいただきました。さらに文部省を表敬訪問し、文部大臣からも激励の言葉をいただくという、シニアスカウトのだれもが夢見た富士スカウト顕彰の記念すべき日でした。

私たち大阪堺ステーク部に、ボーイスカウトプログラムが取り入れられたのは、1985年のことでした。たった4人のボーイスカウトと数人の指導者で活動が開始されたのですが、大迫恵兄弟はその中のひとりでした。スカウト活動が開始されて間もなく10年になろうとしていますが、今年の登録では、カブスカウト27人、ボーイスカウト27人、シニアスカウト13人、指導者、役員も48人となり、大きな組織へと発展してきました。現在、大阪堺ステーク



富士スカウトの面接後（右から大迫恵明兄弟、恵兄弟）

キ部では、若い男性はミューチャル、スカウト活動など毎週集会を開いて活発に活動しています。

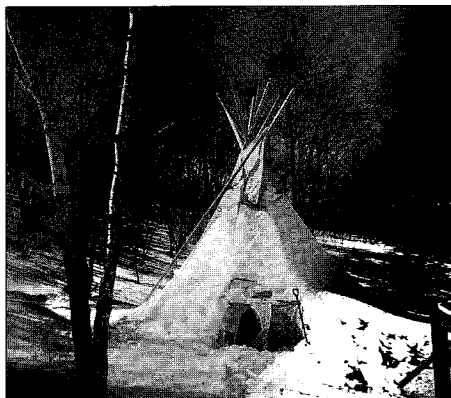
大迫恵兄弟の富士スカウトへの道はボーイスカウトから始まりました。ボーイスカウトの活動で特修章17個のうち14個を取得し、中学2年でボーイスカウトの最高の進級記章である菊スカウトになりました。彼は中学3年になっても最後までボーイスカウトの活動をやり遂げました。学業に加えて早朝セミナーも始まっていましたが、すべての面で努力しました。

高校生になるとシニアスカウトに上進し、グリーンシニア、シニア、はやぶさ隼と進級しました。その間アメリカのバークレーからのスカウトたちと奈良県の大峰山でキャンプをしたり、

9,000人が集う日本ベンチャーという全国大会に参加したりと、たくさんのスカウト活動を経験しながら技能章の修得に向けてチャレンジしました。

シニアスカウトの必修技能章や必須項目は、実習や学習を通してそれぞれ30から40ページほどのレポートを書かなければなりません。個人プロジェクトとして、モルモン経においてレーマン人の子孫といわれているアメリカンインディアンに焦点を当て、「インディアンの生活とスカウトキャンプとのかわりと考察」というテーマで論文をまとめました。アメリカンインディアンの部族によって異なる文化や服装、生活などについて学び、スカウトキャンプを通してその違いを比較検討したのです。信州の雪の中でアパッチ族の住居をわらで作り、住居内外の温度差や暖房後の温度変化がスカウトテントとどのように違うかなどを調べたりもしました。インディアンティピーテントの中で、零下30度という環境で一昼夜過ごしたり、乗馬訓練の実体験をするなどして70ページ近いレポートにまとめたのです。

そして第一関門である泉州地区の面接会をパスし、大阪府連盟の面接会に臨みました。大阪連盟の8人のスカウト指導者が、プロジェクトの内容や技能章について、また将来のことについて次々と質問されました。大迫兄弟は質問者の威厳に圧倒されながらも、精



富士プロジェクトのキャンプでティピーテントで1泊する。夜は-30℃まで気温が下がった

天国から来た おばあさん

東京北伝道部宇都宮地方部宇都宮支部

田代富夫

いっばい気力を振り絞って誠実に答えました。宗教について聞かれると、はっきりと証をし、プリガム・ヤング大学ハワイ校に入学した後、伝道に出ることも述べました。面接官も大迫兄弟の靈性に感じるものがあったようで、感心されていました。このようにして大迫兄弟は富士スカウトの承認を受けたのです。

大迫恵兄弟が所属していた大阪連盟泉州地区堺第28団のシニア隊の隊長は、恵兄弟の父親である大迫信明兄弟です。彼は次のような励ましの言葉を恵兄弟に贈りました。

「恵君にとって単章取得以来、富士章挑戦は決して平坦な道ではなかったと思います。受験勉強という重荷の中で始めたプロジェクト（インディアンの生活とスカウトキャンプとのかかわりと考察）は、当初相当にむずかしくとらえていて、できるかなと思ったものでした。途中で大学受験のためにあきらめかけた時もありましたね。しかし君が励んできた信仰による持続力、継続力の強さの勝利でしたね。」

4年間の早朝セミナー、学校での勉強やクラブ活動（ハンドボール）、教会での活動、そして土曜日、祝日のスカウト活動でほんとうに毎日が忙しく、せわしく思ったことでしょうか。しかし、それらの生活をまじめに雄々しくやり遂げた君を隊長として心から誇りに思います。

雪中の零下30度近い中でのティピーテントによるインディアンの生活の実践キャンプやモカシン（インディアンの手作り靴）作り、生駒山山中での歩行体験、乗馬訓練などの実務面でのスカウト活動や各技能のための報告書作成など、たいへん忙しく、明け方まで部屋の電灯がともっていたこともしばしばでした。主が与えてくださったすばらしい機会を快く身に受け、努力して達成できたことは、これからの人生で必ず生かされるでしょう。」

スカウト活動が福音の実践のよき修練場となり、近い将来、彼らが伝道に出たり社会人として人生を切り開くときに、スカウト活動で得た技能や知識が、よき恩恵として豊かに実を結ぶようお願いしています。□



田代ご家族

私は、接骨院を開業しています。仕事から多くの人と接することがあり、その人々との交流の中で、たくさんのお話を学ぶ機会があります。今回書かせていただくのは、私の信仰生活にとっても大きな変化を与えてくれた出来事です。

もう10年以上も前のことですが、ある家で往診を頼まれました。お年寄りふたり住まいで、そのおばあさんを診るよう依頼されました。

でもその方は頭がぼけていて、私を見るなり「いさおじゃないか、しばらくくだねえ」なんて言うのです。私も「しばらくですわね」なんて合わせながら治療をしましたが、着ている物は小便臭いし、ときどき入れ歯を口から出しては「なんだか口の中からこんな物が出てくるんだけど何だろうねえ」と言って食べかすを指でひっかき出すの

です。これには閉口しました。でも、おじいさんの方は昔教員をしていたとかで、とてもしっかりした人でした。しかし、少し気になったのは、私が訪問してから治療して帰るまで、いつもこたつに入ったままだったことでした。

それから約1カ月たったころです。おばあさんも、だいぶよくなり、もうそろそろだいじょうぶかなと思うころ、おじいさんが「すまないですが、私の足を診てもらえますか」と言うので診てみると、両足が紫色に腫れ上がり鬱血してだんごのようになっていました。いつもこたつに入ったままだったのでまったくわからなかったのです。私はただ事ではないと思い、すぐ内科の先生に診てもらいました。1カ月後おじいさんは亡くなりました。がんの末期だったのです。床擦れができ痛くしい最期でした。そうしてほけたおば

あさんが残ったのです。

実は彼らには息子さんがひとりいました。仕事が忙しく、家には週に1度くらいしか帰って来なかったのですが、母親を見るために家から通うことになったのです。ある日、その息子さんがやって来て「実は母が転んで、またけがをしたので診てくれませんか」と言いました。早速行ってみるとまったく歩けない状態でしたので、その日からまた往診となりました。

それからの往診はまったく悲惨なものになりました。日中、息子さんは勤めに行ってしまう、ほけたおばあさんひとりになってしまうのです。食事は毎日息子さんを作ったおにぎりが2個、しかし当人はほけているのです。まともに生活できるはずはありません。おしめは、外して汚れているし、おにぎりは顔じゅうに塗りつけるし、それでもまだ痛くて動けないうちはよかったです、やがて這いだすようになると事態はさらに悪化しました。

大便をその辺に塗りつけたり、ある時は食べていました。あまりのひどさに吐きそうになったこともしばしばです。毎日毎日どうしたらよいか真剣に悩みました。何もせずにやったふりをしようか？ 臭い、汚い、行きたくない。でもしかたなく治療だけは続けました。

できるだけ早く終わりにして、できるだけ早くその家を出ました。私には当時、クリスチャンとしての心の葛藤がありました。隣人への愛は知っていても、その時の私にはかなり根性と努力が必要だったのです。毎日毎日そこへ行くことが苦痛で仕方ありませんでした。そんなある日、私はマザー・テレサの話を読みました。彼女の仲間たちはそんな悲惨な人たちがおおぜいいるインドの大きな病院（設備はかなり貧弱な所）で、ほんとうに献身的に文字どおり食事の世話から下の世話まで

喜んで働いているというのです。彼の目は輝き、心からの笑顔が見えるのです。私は読んでいてその理由をととも知りたくなりました。

その理由というのは、実は新約聖書に書かれているひとつのたとえ話でした。「これらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」（マタイ25：40）つまり彼らは、一人一人の病人たちをイエスキリストに見立てて世話をしているというのです。ですから彼らは世話をしているのではなく、させていただいているという思いで、ほんとうに心から喜んでやっているというのです。

この話を讀んだ時、私は頭をがつんとたかかれた気がしました。私の心の中で大きく何かが変わりました。イエス様の体に触れる、イエス様と言葉を交わす、なんてすばらしい経験なのでしょう。その日から例のおばあさんの所へ行くことが苦しくなくなりました。汚してしまったおしりをふいたり、おむつを取り替えたり、汚れた畳をふいたり簡単にできるようになりました。そんな日が1カ月くらい続きましたが、結局息子さんの方が音を上げ、彼女はキリスト教系の養護老人ホームへ引き取られることになり、往診は終わりました。私はその時はまだ彼女の行き先を知りませんでした。

ところがある日、偶然その老人ホームへ往診に行くことになり、またばったりと彼女と出会うことになったのです。彼女は、私を見つけると早速「いさおじゃないか」と声をかけてきたので、「うん、また来たよ」とかわしました。それを聞いていたほかのおばあさんたちが「親戚なんですか」と聞いてきたので「いいえ、違いますけど、前に往診していたのです」と答えました。ところが、そう答えているうちに、すかさず、おばあさんの極め付きの一発が出たのです。

入れ歯を出して食べかすをかき出し始め、おばあさんたちに見せだしました。びっくりし、しかめ面をしているおばあさんたちを制して、私は入れ歯を受け取ると「うーん、どうしたんだろうねえ。不思議だねえ」と言って流しできれいに洗い「ほら、出なくなったよ」と言っておばあさんに渡しました。見ていた老人たちが「先生になんてことさせるの」と言うので、私が「だいじょうぶですよ。どうってことないですから」と答えると、ほけているはずの彼女が突然こう言ったのです。「この人は神様のような人だよ。いつも親切なんだよ。ほんとうに大した人だよ。」この言葉には私もびっくりしました。こんなにはっきり正常に話したのは初めてだったからです。この言葉と一連の出来事を見ていた老人たちは一様にうなずいていました。たまたま彼女が口にしたことにせよ、私はこの経験を生涯忘れないでしょう。私は今でもその言葉は主が彼女を通して私にくださった励みだと思っています。

ところが次の日さらにびっくりしたのは、その場にいた老人たちがその時のことを大きめにホームの人たちに話したので、たくさんの方が私もかかりたいと言って20人以上の人が集まって来たことです。「この人がその先生ですか」などと言われ、赤面してしまいました。もちろん、そんなことを期待してやったことではなかったでほんとうに恥ずかしい思いでした。

この経験を通して私は、仕事においても、教会においても大切な何かを学んだ気がします。常にそしてすべての人に、主が言われたような態度で接することができるほどまだまだ人間ができてはいませんが、この思いを生産育て続けていきたいと願っています。そしていつかは、私自身の人格となるようにと。（たしろ・とみお 東京北伝道部第一副伝道部長）

「下野新聞」 1994年3月13日付 家庭の夕べを 開いてみては

◇わが家では毎週月曜日に「家庭の夕べ」を開いています。この日だけは全員が集まって特別な時間を過ごすのです。夕食後の三十分から一時間ほどの時間ですが、この中で家族会議やゲーム、歌を歌ったり、一緒に本を讀んだり、親からの提言、子供からの提言とさまざまです。各自が担当を持ち、それぞれやりたいことを計画すると、司会者の長男に前もって伝えます。手品や親と一緒に行うゲームは特に好評です。

◇それとわが家には、とても大切な原則があります。それは中二の長女から四歳の四男まで五人の子供たち一人ひとりに同等の発言権と選挙権があり、家族の決め事は拳手による賛成多数で決定するというものです。

◇もちろん子供たちのお小遣いもこの会議で決定します。ところが意外と票の取りまこめは難しいらしく、親としては助かっています。ちなみに長女は週二百円にとどまっています。皆さんも家庭の夕べを開いてみてはどうですか。

（南那須町 田代富夫・37歳・柔道整復師）

我が家の子育て奮闘記

——7男3女の子供とともに——

東京東ステキ部長生ワード部 新野信子

私はまだ、子育て真っ最中ですが、今までの経験と証をしたいと思います。

我が家には、子供が10人おります。男の子7人、女の子3人です。長男19歳をはじめ5人まで男の子で年子です。2年空いて女の子3人年子です。また2年空いて男の子が2人年子です。いちばん下の子は8月で6歳になります。

初めから10人と決めて産んだわけではありません。長男が生まれた昭和50年当時は、赤ちゃんをコインロッカーに捨てるというニュースが、毎日のように流れていました。それを聞いていて、できるだけ我が家に霊の子供を受け入れたいと思いました。またいつも「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」という誠命が頭の中にもありました。

健康だったおかげで、次々と子供を授かりましたが、最初の思いと違い5人目で精神的にも肉体的にも霊的にも限界を感じ、育児ノイローゼになる人の気持ちが変わり、もう子供はいらないと思いました。そういう時には、とにかく家事をほうって「聖徒の道」や扶助協会の個人学習ガイドをむさぼるように読んだり、朝赤ちゃんにミルクを飲ませながら、聖典を読んだりしてなんとか頑張れました。また夫に祝福をしてもらったりして力を得ることができました。

またある時、夢を見ました。その夢はカラーでした。私はそれまでカラーの夢を見たことがなかったので特別なものを感じました。

その夢は次のようでした。私の目の前には深い谷底があり、対岸は上の方が森になっていて、下の方は青や赤、緑のまるで宝石の縞縞のような模様になっていました。きれいだなと思

眺めていると、私の後の方で遊んでいた子供のボールが私の足下に転がって来ました。そのボールを取りに来た子供が後ろからひょいと私のことを押した瞬間、私と子供は、ともに宇宙遊泳のようにふわふわと下に落ちて行きました。「主よ、助けて。主よ、助けて」と言うと、元いた所にふわふわと戻って行くのです。あと一歩という所で主を呼ぶのをやめると、またふわふわと落ちて行きました。2、3回繰り返して、最後まで「主よ、助けて」と主を呼んだ時、やっと元いた所に戻って来ることができました。この夢は主からのものだと思います。

日々の雑多なことにとらわれたり、自分の思いどおりにいかないことにいらだいたり、人をうらやんだりしていると子供まで道づれにして霊的に落ちていくと悟りました。今は子育てをすればいいんだ、自分のしたいことは後でやればいいんだと思い、悶々とした思いは吹き飛びました。

確かに家事の量は多いと思います。洗濯は1日かかりますし、台所も片付かないうちに次の食事の時間が来ます。山のようになった洗濯物をたたみながら夫が「まるで養の河原の石積みみたいだね」と言っています。また「今はきちんと片付かなくてもいいじゃない」と言ってくれますし、子供たちも手伝ってくれますので、皆が想像するよりは大変ではないと思います。

安息日は子供を静かにさせることで手いっぱい何のために教会に来ていいのかしらと思う時がありました。そんな時、ある姉妹に「みたまに満たされた教会に来るだけでいいんですよ」と言われて、心が慰められたことがありました。

経済的な面においてもいつも助けがありました。近所の人や親戚の人、教会の人、友人、両親を通し助けがありました。お産の費用がなかった時にも昇給があったりして、それに充てることができました。必要な時には、必ず神様の助けがありました。教義と聖約第82章10節には「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり」という主の約束がほんとうであることがわかりました。

でもいちばん大変なことは、子供に神の道をどのように歩ませるかということです。このことは夫といつも話し合ってきました。教会で会長会や監督会をするように、家庭で夫婦会議や個人面接、家族会議を行ってきました。また夫婦が仲良く一致することが子育てにおいてとても大切なことだと考えています。そのために私たち夫婦は子供を中心とした「お父さん、お母さん」という呼び方はせず、お互い名前呼び合っています。また、よくデートもします。コンサートや野球観戦、ディズニールランド、一泊の温泉旅行などに出かけます。また、神殿訪問とその後ふたりでする食事楽しいデートのひとつになっています。子供たちも私たちがデートすることによく協力してくれ、また勤めてくれます。

さらに月に1度、私は休みをもらって、家事のたぐいは一切せず、自分の好きなことをして、リフレッシュしています。

家族皆で遊ぶことも大切にしています。キャンプや家族旅行をします。キャンプは長男が小学校に入る前から行っており、我が家の年に1度の行事になっています。昨年はキャンプをしながら北海道を一周してきました。

子供たちにとっては思い出に残るキャンプだったようです。子供たちを楽しみ思い出を残してあげることも大切なことだと思います。

子供たちには家庭の夕べや食事の時の会話を通して次のようなことを教えてきました。

1. わがままをしない

わがままは自分をも他人をも不幸にするものとなります。「三つ子の魂百まで」ということわざがありますが、物心がつく1歳から3歳くらいまでの間にしつけるのが肝心なように思います。泣こうがわめこうが、だめなものはだめと言ってわがままは認めず、落ち着いた後によく言って聞かせるようにすると、聞き分けのよい子に育ち、青少年時の扱いも楽なように思います。

2. 神様のことを第一にする

戒めを守って得た証を子供に話して聞かせました。安息日じゅうふくの日を守ること、聖典を読むこと、奉仕をすることから得た証と祝福を事あるごとに話して聞かせました。また長い間狭い借家住まいでしたので、家族の祈りや個人の祈りの中で家が持てるようにと祈り

続け、それが実現したことは、戒めを守ることにより必ず祝福が得られるという大きな証になっています。

3. 自己管理をする

夫はいつも子供たちに時間は命であり、時間を無駄にすることは命を無駄にすることであると教えています。どんなに才能があっても、自己管理ができないとその才能を役立てることができないと思います。子供たちには目標を持ち計画を立て、1日1日をよく振り返られるように自己管理用の特別のチェックリストを使わせています。またその結果は直接小遣いに結びつくシステムになっているので、小遣いを得ようと努力しているうちに少しずつ自己管理ができるようになります。

4. 自分で証を持つ

証を持たせるためには、お祈りと聖典を読むこと、安息日を守ることが不可欠です。これらのことがプライマリーの年代の間に習慣となるのが大切だと思います。我が家では上記の3つのことを毎日毎日言い続け、また私たちも努力してきました。そうすると青少年

の時期にいろいろな活動、経験を通して証が持てるようです。ジョセフ・スミスの見神についての証も自分で知ることの大切さを教えています。

5. 自立する

我が家では高校を卒業したら男の子は家を出します。そのため早く自立できるように教えてきました。ですから安易に物を買わず、お手伝いをしないと小遣いはありません。通学用自転車や部活の用具は自分の小遣いから買いました。足りないときはお父さんに借金をしています。またカンファレンスのお金も半分は自分で出しています。ことわざに「若い時の苦勞は買ってでもしろ」とか「かわいい子には旅をさせよ」とありますので、苦勞させています。目標を持って、計画を立てるよう教えています。

今現在ふたりの子供は家を出ていません。長男は2浪中、次男は大学1年生ですが、ふたりとも新聞配達をしながら生活しています。夫は若い時に新聞配達をやったとてもよかったと、子供たちにもよく話していました。私も夫の考えに賛成しています。家を離れてみると家族の大切さがわかるとみえて、長男は家族一人一人の誕生日にカードやプレゼントを送ってくれます。次男は、まだ家にいる弟や妹たちに次のような内容の手紙を書きました。「ひとりになると兄弟にやさしくしようとすることもできないから、仲良くするように。手伝おうと思ってもできないから、手伝うように」ということでした。まだあと8人控えています。これから先、どうなるかわかりませんが、夫といつも話し合っ、主の導きをいただきながら頑張りたいと思います。そして、収穫の実を楽しめるよう努力したいと思います。

子育ては思いどおりに、計画どおりにはなかなかいきませんが、あきらめず、自分の信仰を育てながら、子供とともに成長していきたいと思っています。(しんの・のぶこ ステーク部扶助協会第一副会長)

新野ご家族



日本での2度目の伝道

——ハンセン長老の呼びかけにこたえて——

名古屋伝道部夫婦宣教師 岩浅美意子

去年の3月の半ば、私たちは突然思いがけず、夫の40数年前の日本伝道部時代の同僚デニス・アトキン兄弟から電話を受けました。それは、ソルトレークの4月の総大会前日、毎年行なわれている日本伝道帰還宣教師の会に当時のアジア北地域会長会会長W・ユージン・ハンセン長老がみえられ、昔日本で伝道した帰還宣教師たちに、もう一度夫婦宣教師として日本へ伝道に行くよう呼びかけられるとの知らせでした。そしてアトキン兄弟はすでに日本に行くことを希望し、夫婦でそのように話を進めていると言われ、彼の興奮がこちらに伝わってくるようでした。そして4月、私たちはソルトレークに出かけました。

当日、かつて日本で伝道したたくさんの方の宣教師の夫婦が集まりハンセン長老から詳しいお話をうかがい、その後活発な質疑応答がありました。

カナダに帰る長い道中、私と夫はずっとこのことについて話し合いました。もし行くとすると何をしなければならぬか、まず第一に私たちの出た後の空き家をどう処理するかから始めて、なんとたくさんの方の決断しなければならなかったことでしょう。

家に帰り、子供たちを呼び寄せて家族会議を開き、私たちの気持ちを話しました。全員大賛成でした。それからほんとうに神様の祝福としか思えないほど、すべてのことが順調にはかどりました。

アトキン長老と姉妹は夫婦宣教師の第一陣として9月の末に神戸伝道部に行かれました。そして11月にマング長老夫妻が大阪伝道部、12月に私たちが名古屋伝道部、1月にジェームズ長老



岩浅ご夫妻

夫妻が東京南伝道部に赴任しました。そしてこの長老たちは皆、かつては日本伝道部の同僚であり仲間でした。何十年か後、伝道部こそ違え同じ時に同じ日本で今度は夫婦で伝道に戻って来るなど、夢にも思わなかったことでしょう。

私たち夫婦はお正月も近い12月29日にこの三重地方部の津支部に来ました。伝道は老若を問わず、やさしいものでないことは知っておりました。そして私たちもその覚悟はしてきたつもりでした。しかしカナダとは違った湿気の多い冷たい真冬の津の寒さは、寒い国のカナダから来た私たちにとっても非常に厳しい寒さでした。何十分も風に吹きさらされてバスを待つ間、そしてまたバス停から訪問先まで歩く間の寒さは厳しいものでした。訪問が仕事の私たちは、毎日毎日随分歩きました。

夜帰宅すると体はしんまで冷え、どんなに暖を取ってもぬくもることができず、熱いお風呂につかることだけが体を温める唯一の方法でした。

足なども長い間歩くのと、疲れと寒さで感覚が麻痺し、歩いていてもちょっとしたものにつまずいて転びかけたことも何回もありました。また夜アパートに帰り、靴を脱いでも足が冷たく硬くなって、足の指を動かすこともできず、夫が両手でもんで、ほぐしてくれたこともありました。若い人にはあまり苦にならない寒さが私たちには非常にこたえました。

特に、70歳の夫にはかなりの試練でした。カナダにいた時にはあまり病気をしたこともなかった夫が、一度風邪をひくとなかなか治らず、治りかけるとぶり返すの繰り返しでした。それでも休むことはめったにありませんでした。そのうちに夫の足の筋肉や関節が痛みだし、それが腰にまで上がって、歩くのもやっと、そしてしまいは寝るのも起きるのも痛み止めの薬なしではできなくなりました。夫はよく「痛み止めの薬で生きているようなものだ」と言いながらも、できるだけ神様のお仕事は続けました。

そして3月23日、三重県四日市市で地方部宣教師大会がありました。アパートを出る前に薬を飲み、帰るまでの分として幾錠かを用意し、それでも痛みが激しいときには途中からでも帰るつもりで出かけました。

大会の合間に私たちはエイムズ伝道部長に癒しの祝福をお願いしました。そしてエイムズ伝道部長の、夫のために天のお父様に心の底から訴えられるような切々たる祝福の言葉を聞いて、私はみたまを感じ、目から涙がとめどなく流れました。夫の目もぬれていました。そして数時間後、私たちは奇跡を見ました。痛み止めの薬が切れるころになっても痛みませんでした。そして彼は薬を飲んでいて時よりも楽に歩くことができるようになりました。な

新刊ビデオの紹介

「ケント・デリカットのレッツ・ファミリング！」

22分 カタログ番号86258 300 価格600円

今年には国連の国際家族年。それにちなんで楽しい家庭をつくるために「家庭の夕べ」を行なうことを提案します。昨年のベストファーザー5人のひとりに選ばれたケント・デリカット兄弟が、みずからの家庭と日本人の3家族の「家庭の夕べ」を紹介しています。教会外のかたがたに「家庭の夕べ」のあらましと、家庭の一致を強調する教会の教えを紹介するうえで最適なビデオです。



んというすばらしい癒しの祝福。その夜何週間ぶりかで薬なしに眠ることができた夫は翌日も信じられないほど楽に体を動かすことができました。私たちはエイムズ伝道部長の祝福とそれにこたえてくださった天父に心から感謝しました。

4月の初め、待ちに待った自動車が与えられ、気候もよくなり夫の痛みは完全には治りませんが、もう薬を飲まなくても自由に体を動かせるようになり、伝道も少し楽になりました。

第二次大戦の後、日本での伝道が再開されてすぐに、夫は宣教師に召されて日本に来ました。そして1949年春、北海道で初の伝道を行なうために札幌へ。そこで私の父が経営していた高校を借り、日曜日の集会を開きました。そして1年後、私はふたりの友人とバプテスマを受けました。バプテスマは岩浅長老により施されましたが、アトキン長老、そしてマンク長老も出席された懐かしい思い出があります。

その後、夫の伝道が終わって私たちは結婚し43年がたちました。6男1女に恵まれ、神様の教えに従いたくさんの祝福を受けました。1975年、四男のミルトンは東京北伝道部に召されました。末息子のペリーは1980年に岡山伝道部に召されましたが、病気のため伝道が続けることが不可能となり帰国しました。私も夫の痛みが激しい時、神様に「どうぞ助けてください。私たちに1年半の伝道を完了させてください」と涙ながらにお祈りした夜が幾晩もありました。

エイムズ伝道部長も姉妹も年老いた私たちをよく気にかけてくださり、いつも気持ちよく伝道ができるように助けてくださったことを感謝しています。また津支部の支部長はじめ教会員の方たち、そして若い宣教師たちにも大事にされていますが、それに甘えることのないよう努力しています。

伝道に出てから、私たちはいろいろな経験を通してたくさん^{あかし}の証を得ました。そして私たちはほんとうにへりくだって神様の僕^{しもべ}として働く機会が与えられたことを感謝しております。(いわあさ・みいこ カナダ、レスブリッジ東ステークス部第8ワード部出身)

教会公認の邦訳聖書

現在、市販されている日本語の聖書には、日本聖書協会発行の口語訳、新共同訳、日本聖書刊行会発行の新改訳など数種類の訳があります。末日聖徒

イエス・キリスト教会が公認の邦訳として使用しているのは、日本聖書協会発行の口語訳聖書(1955年改訳)です。一般書店で入手しにくい場合は、教会管理本部経理課を通じて入手できます。

「聖徒の道」予約購読キャンペーン開始

1995年1月号より価格改定

来年度の「聖徒の道」の予約更新と新規予約のためのキャンペーンが、8月第4週から9月いっぱいまでの約1カ月間の予定で行なわれます。

大管長会からのメッセージにあるように、国際機関誌(「聖徒の道」)がすべての家庭に備えられ、一人一人が「聖徒の道」から得られる霊の糧をもって信仰生活を歩まれるよう、お勧めいたします。

毎年予約購読の手続きが期日に間に合わず、1月号を年末に入手できないかたがたがおられますので、お申し込みはユニットの「聖徒の道」係を通して、以下の要領でお早めをお願いいたします。

・申し込み先:

〒106 東京都港区南麻布5-10-30

末日聖徒イエス・キリスト教会
管理本部経理課

☎03-3440-2351 (代)

・締め切り:

9月30日(管理本部経理課到着分)

・購読料金:年間2,400円

(1995年1月号より価格改定。各月号分売200円。普通号、大会号共通)

★銀行口座からの引き落としによる申し込みが可能になります

これまで予約更新、あるいは新規の申し込みの際には、「聖徒の道」係に現金を添えて注文手続きを済ませるか、個人で郵便振替を利用するかのどちらかでしたが、来年度の購読分から、銀行(信用金庫、郵便局も可)引き落としによる申し込みが可能になります。

ユニットに送付される「口座引き落とし申し込み書」に必要事項を記入したうえで、「聖徒の道」係にお渡しください。口座引き落としをご利用になることにより、現金授受の必要がなくなります。また来年度からのキャンペーン時の手続きも簡易化され、引き落としの確認のみとなります。なお、手続きの詳細については、ユニットの「聖徒の道」係にお問い合わせください。

7月に召された専任宣教師

第179期生 15人



後列左から1-8, 前列左から9-15

《名前》	《出身地》	《伝道地》
1. 竹本 恵二	名古屋M/富山D/高岡B	東京南伝道部
2. 田中 幸男	名古屋M/石川D/金沢B	沖縄伝道部
3. 宮本 宏和	大阪堺S/岩出B	神戸伝道部
4. 松本 卓二	東京北S/越谷W	大阪伝道部
5. 中 章	名古屋M/三重D/四日市B	大阪伝道部
6. 原口 晃二	岡山S/津山B	札幌伝道部
7. 塩澤 充洋	静岡S/浜松W	岡山伝道部
8. 馬込 真弘	横浜S/小杉B	福岡伝道部
9. 寺本 勝美	名古屋M/石川D/小松B	神戸伝道部
10. 片桐 美佐子	札幌西S/新琴似W	東京北伝道部
11. 鈴木 利佳	大阪S/枚方W	名古屋伝道部
12. 丸山 友紀子	東京北S/越谷W	神戸伝道部
13. 日暮 和美	東京北S/越谷W	福岡伝道部
14. 杉沢 由香	東京北S/中野W	福岡伝道部
15. 矢島 朋子	札幌S/旭川第2W	東京北伝道部

M:伝道部, S:ステーク部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

役員の変動

1994年6月1日から7月4日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 名古屋西ステーク部岐阜ワード部
新監督:後藤康夫
(前任者:中島康貴)
- 名古屋西ステーク部御器所ワード部
新監督:湯浅博満
(前任者:今泉秀之)
- 京都ステーク部下鴨ワード部
新監督:板谷栄
(前任者:川端晃一)
- 岡山ステーク部岡山西ワード部
新監督:安井淳
(前任者:間野富三男)
- 岡山伝道部松山地方部松山支部
新支部長:竹内三郎
(前任者:久保雅宣)
- 沖縄那覇ステーク部那覇東ワード部
新監督:武富良悟
(前任者:真喜屋齊)

編集室から

皆さんの原稿を募集しています

▶ ご投稿の際には連絡先(住所, 電話番号), 教会での責任(役職名), 所属ユニット名と併せて生年を明記し, 写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただいたり, 掲載までに時間がかかる場合もありますので, ご了承ください。

▶ あて先:

〒106 東京都港区南麻布5-10-30
末日聖徒イエス・キリスト教会
「聖徒の道」編集室
電話 03(3440)2666
FAX 03(3440)3275



「火の車で天に昇るエリヤ」 ジョバニ・バチスタ・ピアツェッタ画

「エリヤはエリシャに言った、『……あなたのしてほしい事を求めなさい。』エリシャは言った、『どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください。』エリヤは言った、『あなたはむずかしい事を求める。あなたがもし、わたしが取られて、あなたを離れるのを見るならば、そのようになるであろう。……』彼らが進みながら語っていた時、火の車……があらわれて、ふたりを隔てた。そしてエリヤはつむじ風に乗って天にのぼった。」(列王下2：9-11)



神が用いられる方法は、説教と忍耐によるものであり、強制や厳しい対決によるものではありません。神は善意にあふれやさしく導き、常に私たちの自由意志と独立を尊重しておられます。神は私たちを助けたいと望み、その機会を備えておられますが、私たちの自由意志を侵してまでそうされることはありません。……

サタンは私たちを選ぶ権利を破棄させ、ついにはいかなる選択をも禁じることを望みましたが、神はそうなることを望んではおられません。天父はそのようなことは決してなさいません。むしろ、神は絶えず私たちを見守り、私たちが正しい道を歩み、正しい選択をし、みたまの声を聞いてそれにこたえ、みたまの導きを感じられるように助けてくださいます。正しいことを行ない、喜びを見いだすようにという、主のやさしく、力強く安らかな誘いは、「時が存在するかぎり、大地があるかぎり、または救うべき人が一人でも地上にのこっているかぎり」私たちとともにあるのです。（モロナイ7：36）
——ハワード・W・ハンター大管長